国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸名所図会

三

124
20
114

東京圖書館

和書門	地理類	九一	六函	二架	〇號	二〇冊

別

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

三縁山増上寺　廣度院と號爾東淨家の總本寺十八檀林の冠首はして盛大の佛域なり百一代開山は大蓮社酉誉上人中興を普光觀智國師なり

十八檀林は武總常野等を存在を阿弥陀佛六八本願の中第十八を以て最勝とまる永因を御當家御称号松平氏の祖や代々歳を閲歴能雪霜をおかされを又君子の操ありく太夫の封を受く其守や公は従ひ細はわのときは十八公なり依く是を弥陀の十八願を精舎十八區を建く永く揚擅林とり設けくのひ子孫永く安くよハ霜雪の多く英才を育しく法運興窮の據盛處を従ひ源家の御代を淨家の白旗流義よう代々方代の後松樹榮茂もろくくの

なるへきをと表しのみありとそ以上淨宗護國篇新著聞集なるの意を採摘せ

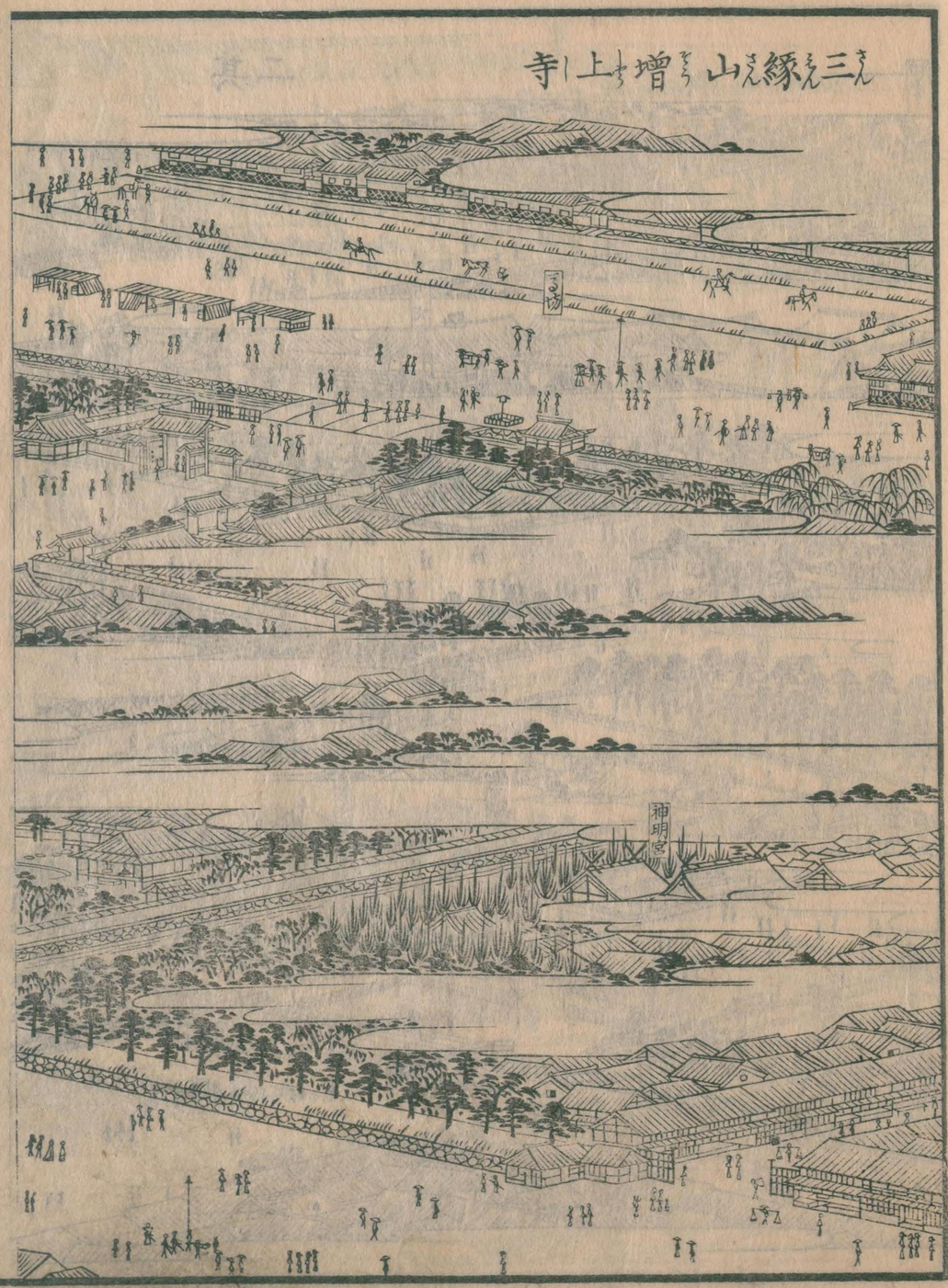
本堂本尊阿彌陀如来　恵心僧都の作中座像御長四尺

額　三縁山　廓山上人真蹟　上人ハ當寺第十三世なり甲州の産あーく高坂彈正の子なりと

御經藏　本堂の前左の方舞の中よあり或人云そまゝ納る所の一代藏経を宋板ゆーく其昔豆州修善寺よあり平政子の寄附なりとそ後彦坂九兵衛尉　台命を奉し當山よりつを菊岡伯涼云昔ハ方丈ありーしを寛永九年照誉上人学大和尚経藏を創立しるとなり今も官造よ列せ

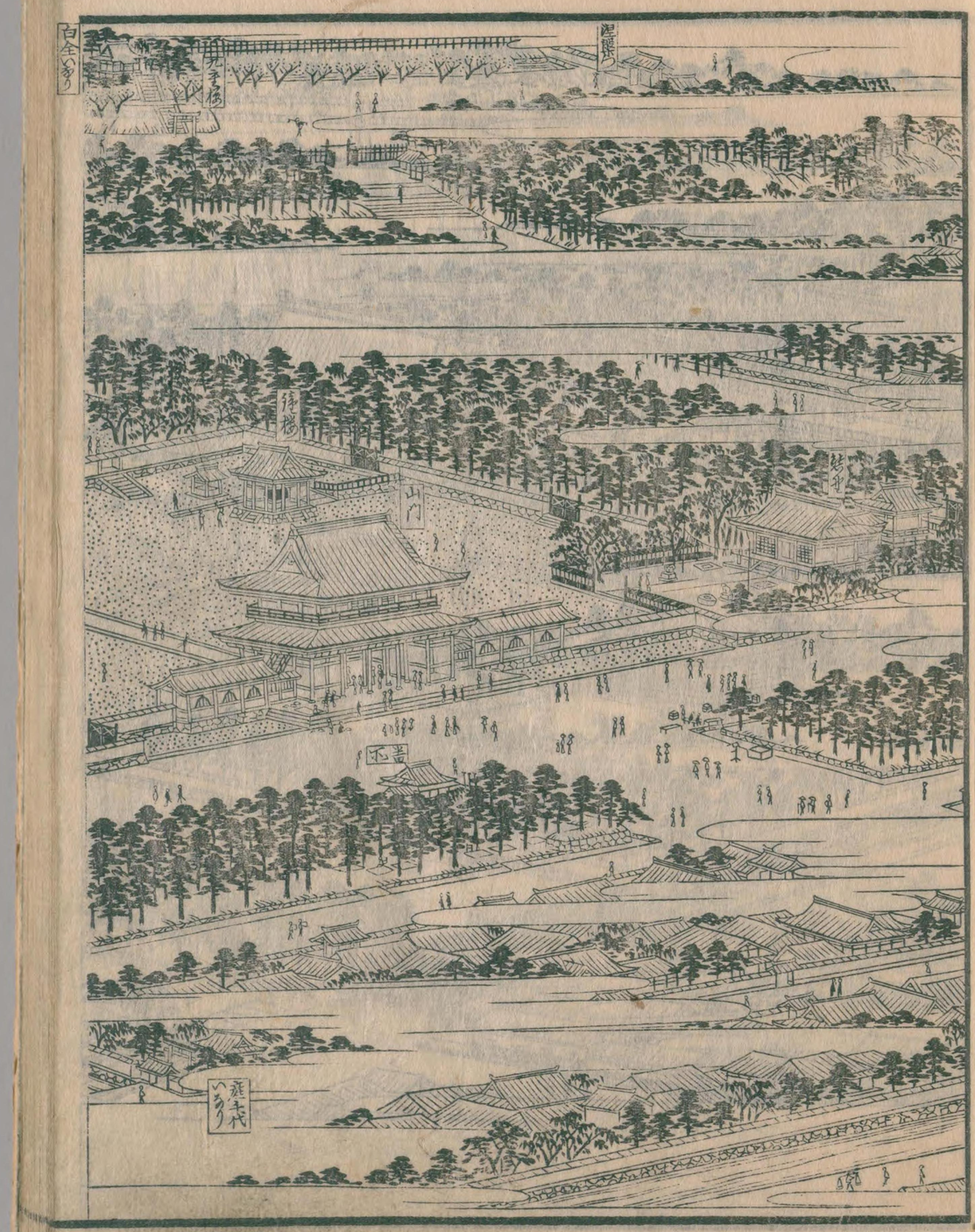
開山堂　同所左よなーく當寺開山以下累世大僧正の尊像ぞ安置せ

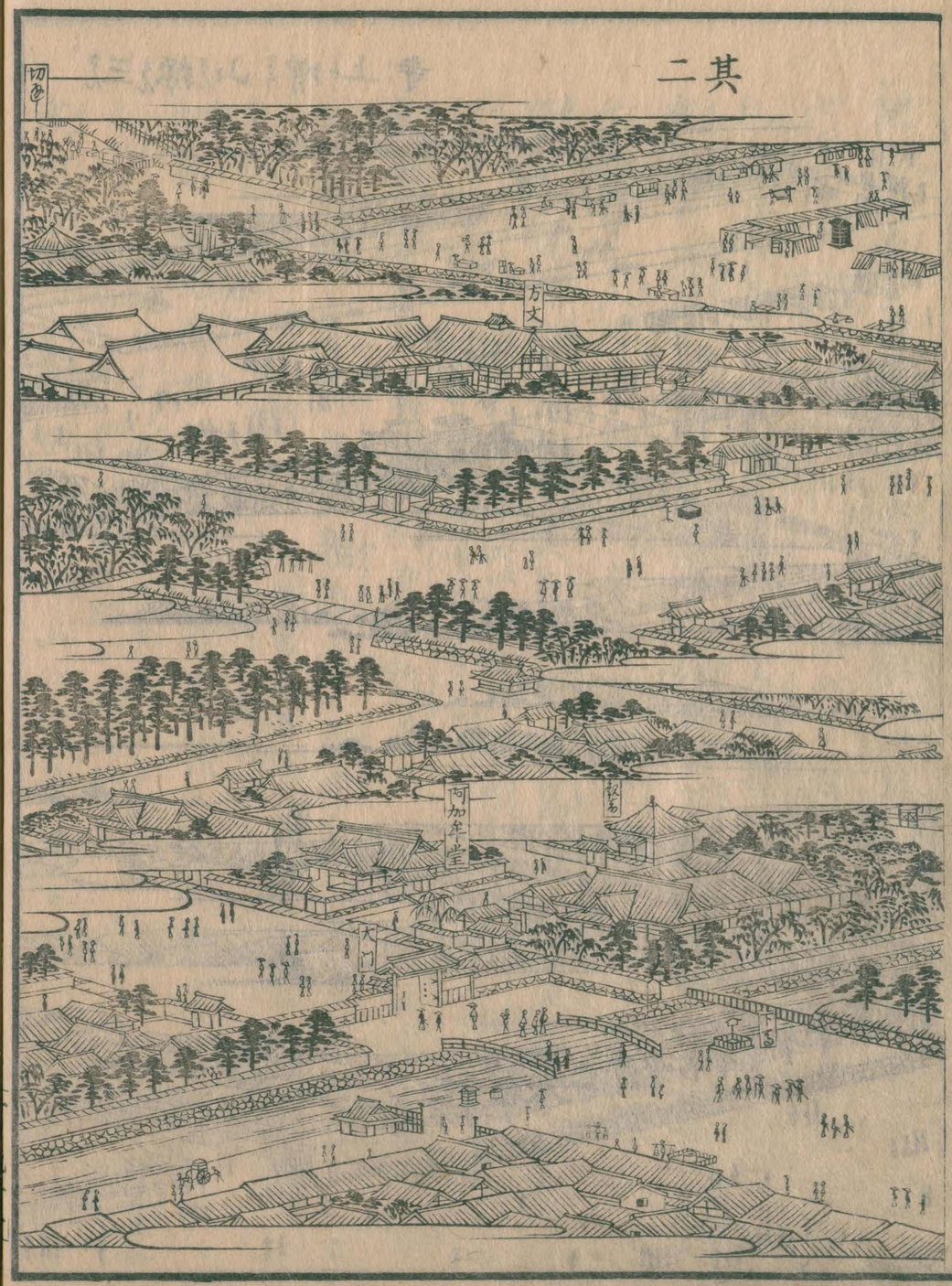
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



三縁山増上寺

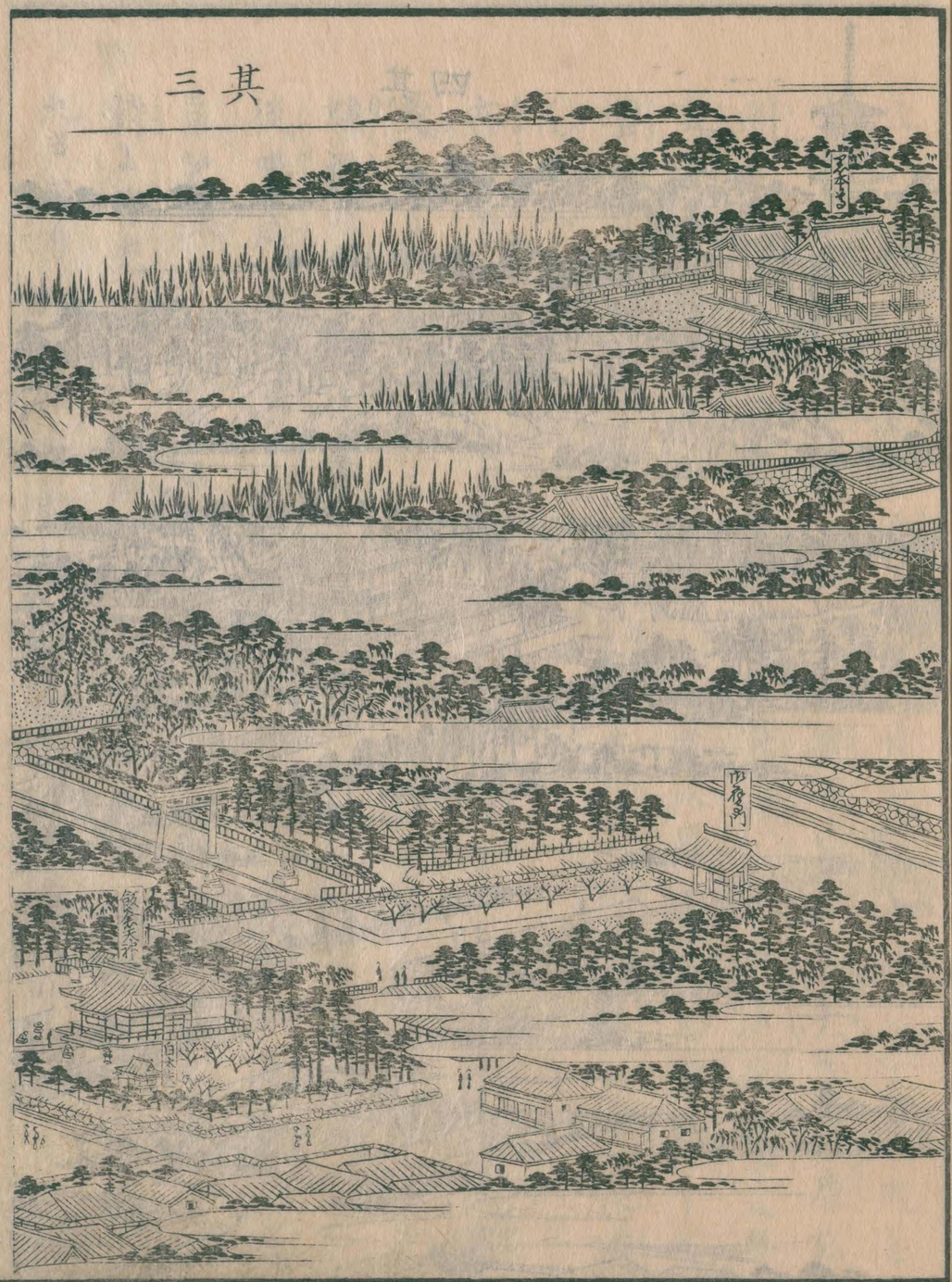
開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス 鎮西一統第 貞治五年
八世の祖とす
七月十日 十葉系圖貞治二年 北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守
六月三日とあり
氏胤母ハ新田氏なり童名を徳寿丸と云 千代とあり 徳加冠して
胤明と称す出離の志深く釋典を慕ひ九歳ゆゝく遂ゟ同國
千葉寺ゟ入て落飾し初ゟ密教を学ひ後岡公ゟ投帰して浄
宗ゟ入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺ゟ
住せる 今の増上寺是なり江戸名勝志ゟ云 増上寺の
旧地ハ麹町一丁目越後守邸と云 此寺始ハ真言瑜伽の
道場なりしを竟ゟ光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗
風を轉して浄業の精舎とす永享十二年庚申七月十八日
寂す歳七十五 臘六十七 東國高僧傳ゟ應永二十四年 中興開山
勅賜普光観智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人
と号す 平山先傳門尉季重の後裔なり 傳燈 天文十三年 濩國篇
武州由木ゟ移る始衣を庁山の宝臺寺ゟ掘ひ十八歳感誉 十年ゟ作る

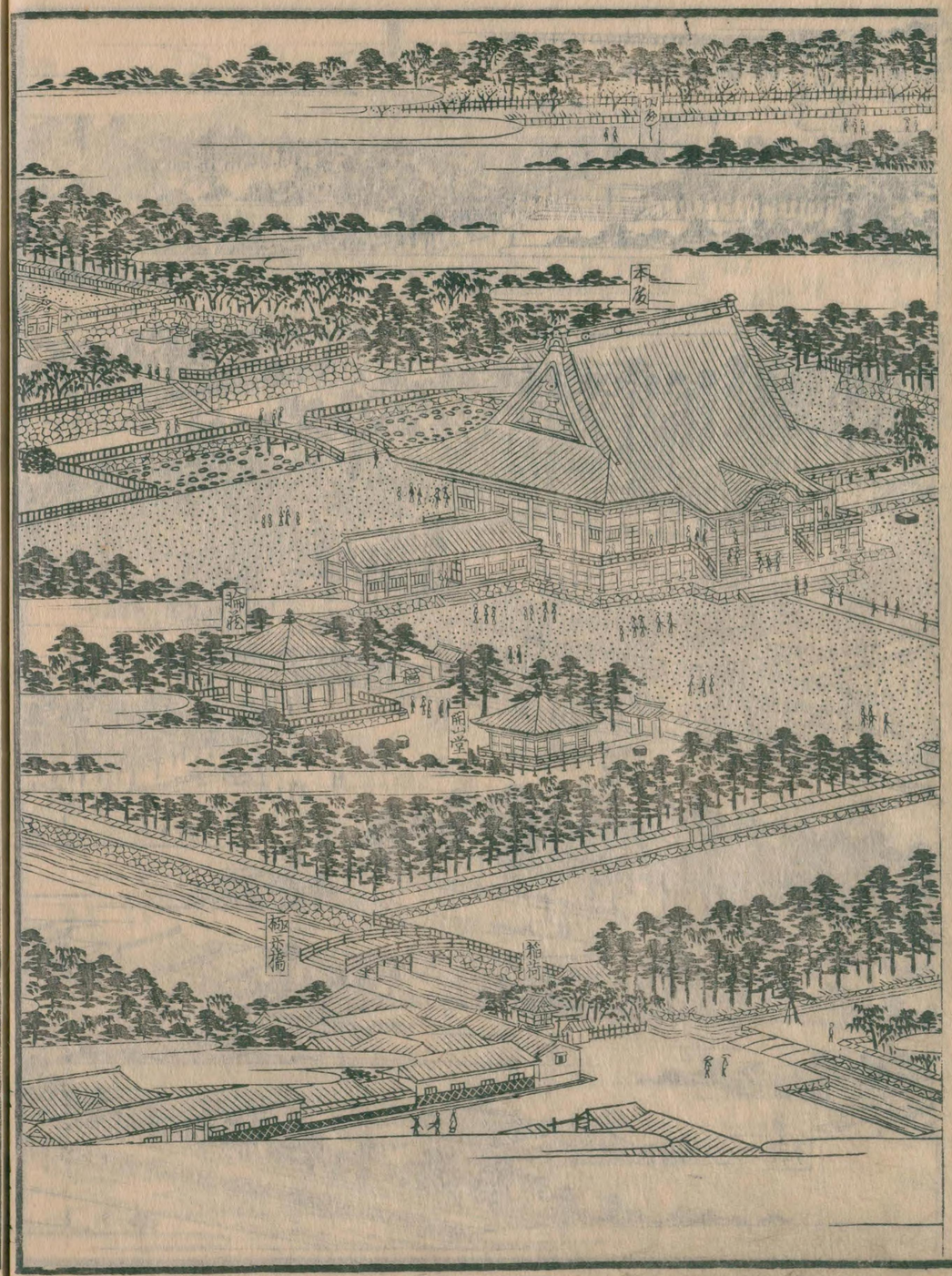




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

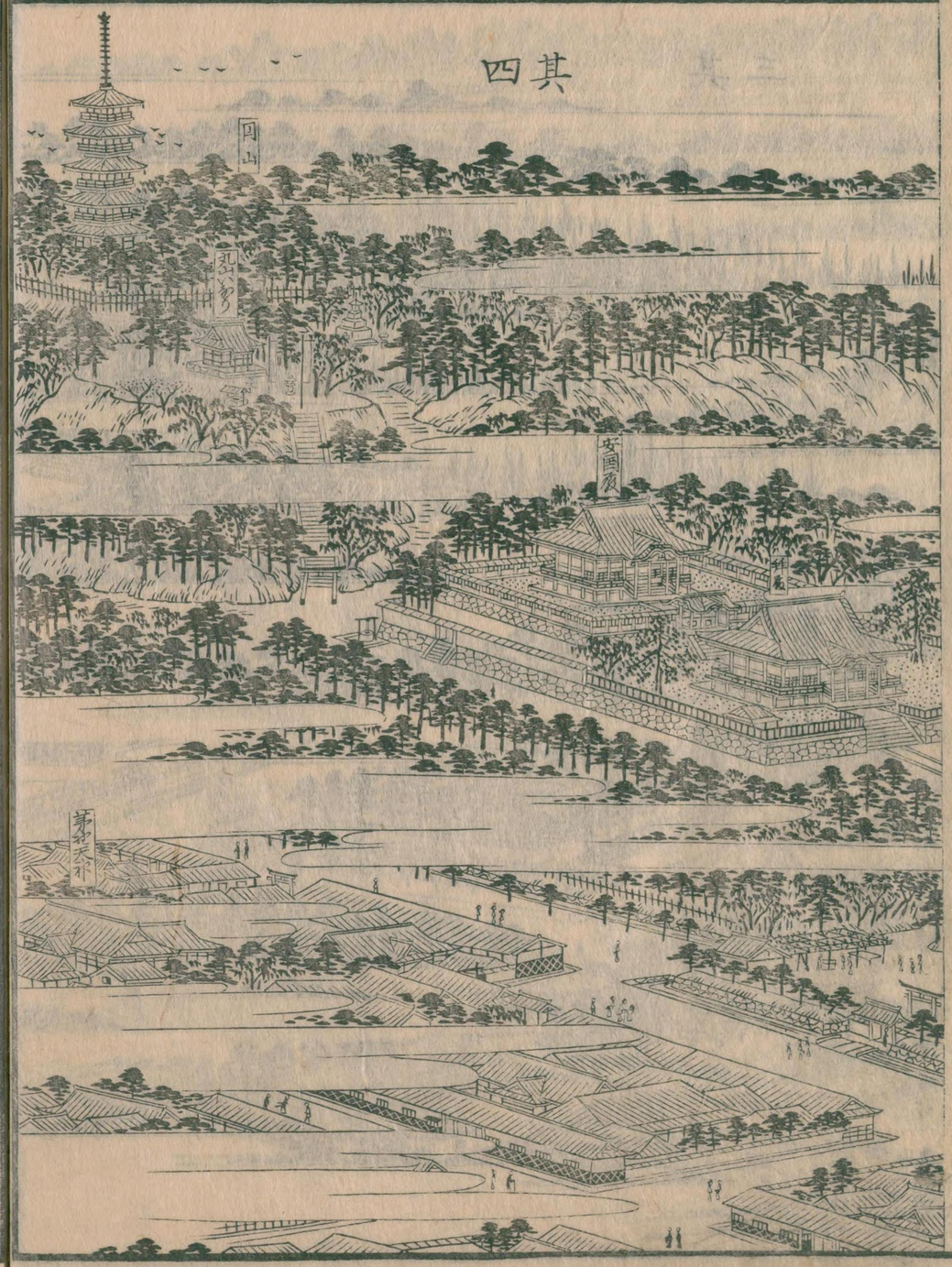
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



上人ゟ帰朝登壇受戒を天資聰悟かつ顯密の教を究む上人没後上葬ゟ到ル長傳寺を創し大ゟ法席を開く人呼て教海の義龍蓮苑ゟ祥鳳とりゟ天正十三年雲誉上人の會下ゟあり同十七年八月墨書を傳兼して増上寺弟十二世となる（當寺弟十二世う）同十八年天下安靖なるに逮んて大ゟ大神君の眷顧をゟひ屢営中ゟ請せられて法要を説聽受しゟひ崇信他ゟ異なり竟ゟ増上寺を修営せしめ又植福の地とゟへり又後陽成帝師を宮内ゟ徴しく道を問ゟ盛ゟ浄教ゟ深旨を陳ゟ叡感あらく褒章を加へ新ゟ宸翰を染ゟひ特ゟ普光觀智國師の號を賜ゟ時ゟ慶長十五年七月十九日なり元和六年師微恙を尓ゟ嗣君

増上寺山内

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

大将軍親ら臨むで忝くも疾を問せ玉ふ十一月二日諸徒よ遺誡し辭世の偈を書〳〵く曰く佛話提撕心頭塵未後一句但稱佛と筆を抛く端座合掌し佛号を唱へく化を世壽七十有七僧臘六十獲國篇世壽八十とあり是なるべきを徒流よ浴を撰述まる和論義決擇集阿弥陀経直譚等大ふ世よ行る傳燈系圖等よ出つ

大銅鐘　本堂の右の方よあり銘曰新鑄供鐘掛三緣山増上寺之樓二十六世森誉上人歷天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源秘鑄工椎名伊豫吉寛云〳〵其聲洪大ゐ〳〵く遠く百里に聞あ一撞の間の響尤長く〳〵く引人魄ふ後ひく當國熊谷の辺よ聞ゆるの〳〵隅つ又安房上総へも聞ゆるの〳〵ありかしこくも江戸より十六里を應と称せ或ハ源九郎義経を拘まるゐ

熊野三所權現祠　同所よあり則當寺の鎮守神と称せ

黒本尊堂　本堂の後蓮池より奥の方よあり本堂の右の方よ向ふ丈程あり銘曰新鑄供鐘掛三緣山増上寺之樓二十六世森誉上人歷天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源秘鑄工椎名伊豫吉寛云〳〵其聲洪大ゐ〳〵く遠く百里に聞あ一撞の間の響尤長く〳〵く引人魄ふ後ひく當國熊谷の辺よ聞ゆるの〳〵隅つ又安房上総へも聞ゆるの〳〵ありかしこくも江戸より十六里を應と称せ或ハ源九郎義経を拘まるゐ

故よ九郎かるとの意なりとも始參州桑子の明眼寺よありしを某の邑の調をゆく寺產ゐ充此靈像をなるひく常よ持佛とあしゐひしう竟よ當寺よ迄〳〵略ま所別當を安立院と号す

新〳〵宝帳玉扉搆飾精巧と極むと以上浄宗護國篇よ載る所〳〵毎歳四月十六日四月八日同十七日緒人らよ參詣まるをゆるさるる

三門　元和九年癸亥沛建立或云八年なりと樓上よ釋迦文珠普賢の彼岸の中日又二月十五日四月八日參詣まるよ登樓をゆるさるる本堂構の外南の方よあり四月十七日八所祭礼ゆく參拝を許さるゐ人多〳〵來由ハ其譯あるをゆゑ是伏略ま所別當を安立院と号す

五層塔　同所よあり佛殿の地若林の中よ酒井雅樂矣の建立なりとのゐ

涅槃石　同所よあり佛影物師吉岡豊前作なりとも号く

曼荼羅石　同所よあり作ことを来迎石とも名つく

後藤祐乗得乗の鷲門　同所よあり

極樂橋　同所前の溝よ架まる石橋をいふ

宗廟

御當家　御代〳〵の御霊屋なり當寺院中より別當を勤む

常念佛堂　涅槃門の方よあり東照律院と号す浄土律ゆく當山の別院なり本尊ハ阿弥陀如来の像ハ恵心僧都の作なりと称せ多くの星霜を歷く金泥ことゐ

性壽庵　方丈の後の方よあり尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置故よ俗よ薩摩堂とよべり側よ小笠原監物を始とし〳〵く殉死

五人の石塔あり　柳の井といふ　同所南の坂通りよりある名泉なり

飯倉天満宮　天神谷よりあり　當山の地主神なり　昔飯倉の神明も此地よりうつす　同所

宝松院　別當なり　茅野天満宮　同所南の方松林院よりあり　社地より梅樹を多く栽く二月の頃一時の荘観なり

舊跡　山下谷明定院よりあり　是も當山の別院なり　圓光東漸大師　神像ハ菅神の直作とそ

大和尚明和七年より建立せる六間四面の堂なり　戒壇造立なり

圓座松　同所より圓山同所あり　辨財天祠　赤羽門の内蓮池の中島よりあり　本ハ當山の別院なり

右大将頼朝卿絶命の法花堂より安置ありし星霜を経て後観智國師感得ありて當寺宝庫へ納めありしを貞享二年生誉豊玄上人此所より一宇を建て一山の持守とありしより宝珠院と号く

此所門より外へ赤羽中島より芙蓉洲へ架せる橋なり　子聖権現社　清林院別當にして山下谷よりあり　産千代稲荷　観智院よりあり　昔ハ普光院と号くとそ當寺ハ合蓮社

明誉檀通上人の旧跡なりとそ　阿加牟堂　東の大門の通り常照院よりあり

大門　東より向ふ當山の總門なり　常念佛の道場なり　御成門　北の方馬場より相對す　此所外より下馬札を建らる

涅槃門　涅槃像あり　通の上より惠照院よりあり　下馬札あり

柵門　山下谷より赤羽へ架せる橋赤羽門ともいふ

當寺旧古より貝塚の地なりしとそ　光明寺と誹せし　真言瑜伽の密場なりしとそ

後小松院の御願により草創ありし

古刹なりしを至徳二年酉誉上人移し住せるの後竟に誉上人傳通院三ケ月の徳化より歸しし寺を改めて三縁山増上寺と號し宗風を轉じて浄刹とせし事跡合考より出せる三縁山歴代系譜より云く當寺草創之地者貝塚今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長三年戊戌八月なり移于芝云々日比谷より芝へ移てより慶長十八年辛卯平川口へ移されし後慶長武徳編年集成より慶長三年戊戌云々天正十八年庚寅江戸の大城へ入らせられし比谷古へ地を接をかぶ混しそいつれ是則比谷の地よりそのまゝ

東照大神君　天正十八年始て江戸民家を以て鼓腹し老幼相携て道路より拝迎し奉る幸より寺門の前路を通御あるより觀智國師も是を拝せんとして寺前より貌雄毅尋常ならざるを見あるより時の師の道

そのひ其名を問せ給ふに乃寺より入て憩のひ其後當寺を以て植福の地となし永く師檀の御契約あり

御崇敬あつく屢師を當中より清せ給ふ法要を聴受なり待遇ひとしからず師を殊より是を親王より比せられ師も亦以て永式とす今より至て歴代の住持成この栄をうく　時より寺境隘狭ゆゑ

大城ゟ接近ゟ是乃北ノ谷ゟ今の地ゟ移ゟゝゟ大ゟ資財ゟ
喜捨ノ殿堂房室ゟ至ルまゟ悉ク営建ノまゝ最宏壮の大梵
刹となる事跡合考ゟ慶長十年乙巳本堂
回廊等尚造営あるゟ大佛藍とゟ云ゟ
勃興ノ念佛の聲天下ゟ洋ゟゝたるゟ
今夜祥夢を感ゟ師微笑ノゟゝ云ゟく你其夢ゟ
応ゟ卑ふ既ゃて翁云ゟく増上寺軒端の桐木繁ゟゝん
人ゟ結ゟことなゟとゟ果ノゟゝ翌日伽藍営後の余あるゟく竟ゟ宏構鉅材天下ゟ
壮観となるゟ由浄土高僧傳ゟ
抑當山ゟ関東浄刹の冠首ゟゟん數百戸の学寮ゟ疊ゟゝゟゝ
會上布金紺園ゟを比ゟゝん龍象の聚ゟ和實ゟ霊山
軒端ゟ轅ゟ支院ゟ三十餘宇靡ゟゝとゟゝ覺ゟ連ゟゝゟ三千
餘の大衆ゟ常にあゟふ集る中ゟも能化ゟ一代の法蔵ゟ胸間ゟ
貯へ所化ゟ十二の教文ゟ眼裡ゟ程ゟ晒せゟ三心即一の窓の前
ゟを五念四修の月ゟ弄ひ事理倶頓の林ゟ中ゟを実報受
用の花ゟ詠ゟ佛閣の荘麗ゟゝゟ七宝荘厳の浄土ゟ又此ゟ
去ゟ遠ゟゝゟとゟ思ゟゟゟる

御忌参 四月廿五日 涅槃會 二月廿五日 誕生會 四月八日 開山忌 七月十八日 永俊卿一山越宅仕舞ゟ近在の末寺より出て大法會ゟて修ゟ

十夜法會 十月六日ゟ同十五日迄修ゟす

飯倉神明宮 同東の方神明町ゟあゟ

其舊地ゟ増上寺境内飯倉天神の社地なゟと或云赤羽の南小山神明宮の地なゟとも社司ゟ西東氏江戸名所記ゟ往古當社の神主ゟ齊藤氏なゟと云別當ゟ金剛院と号ゟ其餘社家巫女ゟあり

江戸名所記等ゟ日比谷神明とあり今俗間芝神明と称ゟ

足掛郡ゟより名所記ゟ往古當社の神人を招ゟく神主ゟすと云別當ゟ金剛院と号ゟ其餘社家巫女ゟあり

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 當時四貫文
同書又曰 飯倉御厨 長日 御幣五十丁

東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉寄附両村於二所大神宮去永暦元年二月御出京之刻感霊夢之後當宮事御信仰異他社然者平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之時着縦雖為函嶋之在所不相触事之由於祠宮無左右不可亂入神明御鎮座砌之旨度々所被仰合也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

飯倉神明宮

世に芝の神明宮とよべり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進狀下畧

寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處
　在武蔵國飯倉
右志者奉爲　朝家安
寄進狀如件

壽永三年五月三日　正四位下前右兵衛佐源朝臣

按ニ當社を飯倉神明宮と称し
もつぱら其地ハ三縁山今の飯
倉天満宮の社辺なり飯倉と云ハ往古
此地より伊勢太神宮の御厨ありし
ゆへ地名を飯倉と唱へ又伊勢ゟ
御神を齊ひ祭りしゆへ猶飯倉と
武蔵國大河土の御厨を豊受
内ありしゆへなるべし
太神宮の領ゟ寄附のゆへ称
又東鑑ニ同年四月

社記云人皇六十六代　一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座なし奉る　其時神幣と大牙一枚此地ゟ
あらく彼二種の天降る又此地の童女ゟ神統
をあらく此地ゟ跡を
とゞめあらく依て當社を営ミ祭ると
其後建久四年癸丑右大将
頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

永八歳巳ノ次九月吉辰

神宮御祭禮

御門前
氏子中

神田川三井親和画

太好庵

太好

たいこ持

奉御寳前

九月十六日
飯倉神明宮祭礼

御門前
氏子中

千客萬来

茶屋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

日比谷
稲荷社
毎年初午参詣
此あたり深助町と云
三丁目の裏の横中程
仮宅を補理ひ作興
出張ありく
此辺の蕃昌
いちじるし

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附あり〳〵其頃繁昌の
宮居たり〳〵ふ遙み後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北
城主大森實頼を亡して後威を逞うせし頃曼ら為に神
領を掠せらる依て宮社ハ霧よ朽風の破も奉祀の人も
なく大ひ荒廃し〳〵たりしを天正ゟ至て四海昌平の御
恭くも 台命よりく當社の廢れしを興しまい神領若
干を附せらるゝ又寛永十一年甲戌よりく神殿を修造
なし〳〵よりも社頭奮観ゟ復す依神燈の光ハ赫く
として和光の月よりへ利物の花ぬさハ白ひ深くして
神威昔ゟ倍せり 當社の祭例ハ九月十六日より同十一日ゟ
藤の花を画きたる擔割篭(おのおの土生姜珠ゟ彫し故ゟ世俗生姜市又
生姜祭とも唱へり江戸名所ハ木鉢鮮菓物多きを商ひ物の多きを指群集を
今ハ題を驚す檜割篭を俗ゟ拵をきよりのゆく雫ゟ名つく又生姜を賣る
宇田川橋 宇田川町の大通ゟを横切く流ゟ小溝ゟ架せり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

烏森稲荷社

今ハ上を覆ふ石の橋の形を失ひ宇田或ハ宇多と作る小田原北條家の臣宇多川和泉守といへる人架せしと云伝へ朝臣北条氏総より責られ品川表にて戦ひし時宇多川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともに小田原記に大永四年上杉修理亮実験ありて後品

藪小路

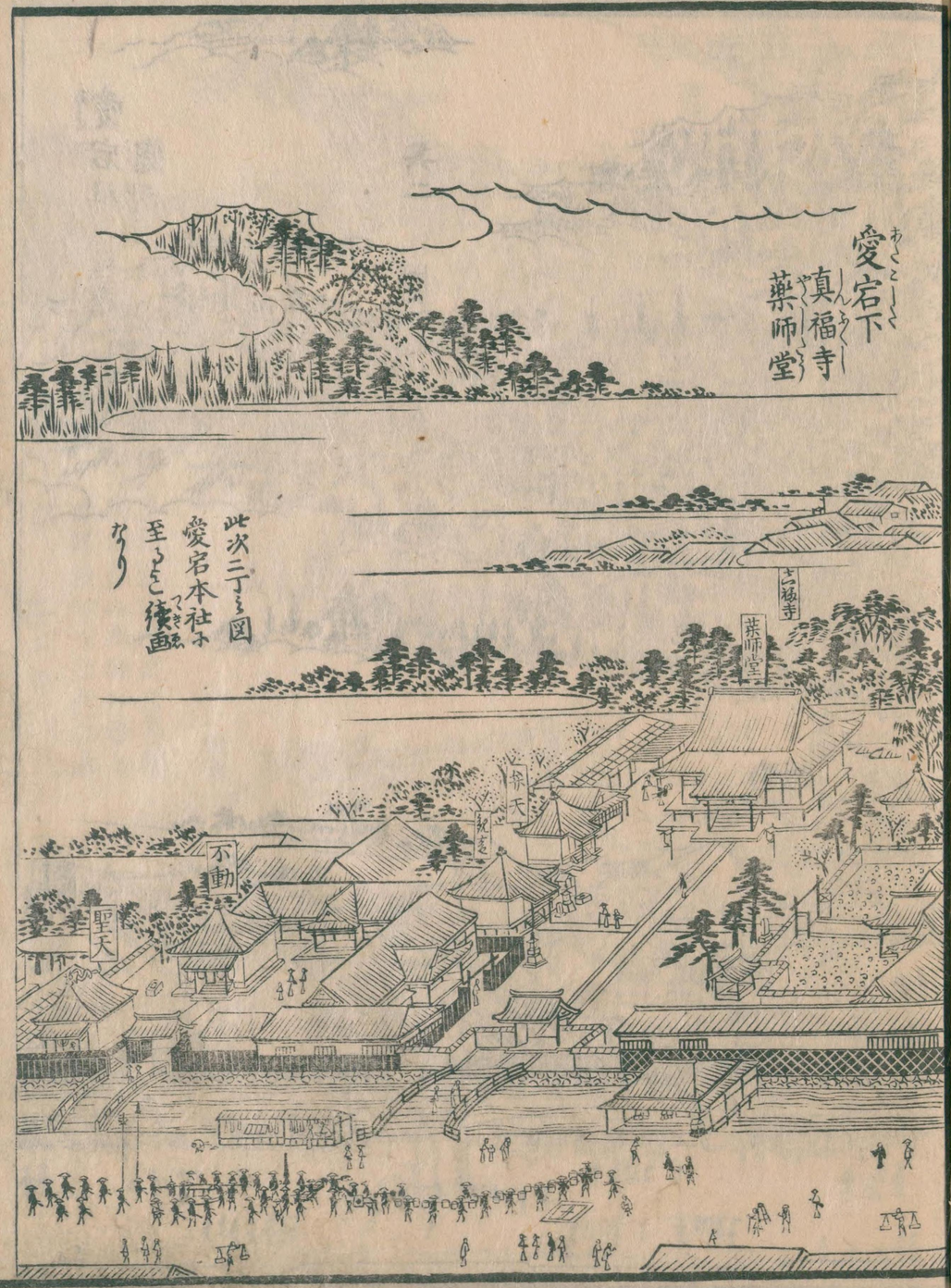
古河御所
足利成氏願書一通 當社ニ藏ス

稻荷大明神願書事
今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書
之狀如件
享德四年正月五日
左兵衛督源朝臣
成氏判

正月下河辺庄司行平建立と附てあり江戸名所ニ此宮地ハ借地ゆゑありしふ斷絶よりおのづから燈挑なりとて鰐口ばかりを與へしと宮守公へ此燈よりく宮居つくろひ明暦の田祿よ奇瑞あり〳〵ハ其後社の邊當社の除地と社司山田氏ゟ柳營御連歌の御連衆ゟ別當ハ快長院と号しく本山方の修驗なゟ祭禮毎年二月初午ゟ執行ひ幸橋御門ゟ假屋移ひ參詣群集して賑ひり

藪小路 愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通ゟを云同所艮の隈裏門の傍ゟ少しそゝりさがれと其來由詳ならず傳説あれとも證とするに足らず

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流る溝川を古く名く新
著聞集ゟ昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑なく
畔ゟ櫻樹幾株ともなくありしとあり其中を流る ゟ櫻川ゟ
下流ハ宇田川橋の方へ流ゟ又三縁山ゟ傍ゟ金杉の川へ流ゟ落合へ
摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸ゟ傍ひくあり新義の真言宗
古江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當ま本尊
薬師如来の霊像ハ弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領
主浅野長政當寺中興照海上人をまして自らの等身ゟ薬師
佛の像を手刻せしめ件の霊佛をハ其胎中ゟ籠まるると
いふ　毎月八日十二日八縁日
詣て恭多し
愛宕山權現社　同南ゟ並ゟ世俗城州愛宕山ゟ同しと云ゟ
自ら別なり　本地佛ゟ勝軍地蔵尊ゟ行基大士の作
なり永く火災を退けまゟの守護神なり樓門の金剛力士ハ

愛宕社總門

共二

男坂

女坂

役行者

別当

惣門

本地堂

京洛移迁座武州築檀
構閣陟山丘誰知帯帛
神封物却作汝門活命
謀

羅山子

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

其三

山上
愛宕山権現
本社図

宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連關下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵬鯤忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

服元喬

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

運慶の作同二階の軒よ掲し愛宕山の三字ハ智積院権大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下よりあり新義の真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と號し二世俊賀上人とす

（四箇寺とハ湯島根生院本所弥勒寺當所真福寺並ふ當寺をいふ）

神證上人字を春音といひ俊あるに依て春香と号し下野の人みして姓ハ塩谷氏母ハ皆川氏なり元和五年鈞命よ依て金剛院よ退居をゆるされ天年を終ふ春音の坊ハ遍照院と号を今の圓福寺是なり金剛院普賢院満蔵院鏡照院壽桂院等一世の豪俊にして皆上人字ハ圓精と号し野州西方邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱が後裔父ハ伊勢宇近律神祠よ祈りて産す其始下妻の圓福寺よ住を然るよ其頃下総結城の元寿上州松井田秀寧等一世の豪俊にして皆上人を慕ひ共よ新義の三傑と称せらる元和五年俊賀上人愛宕権現の別當よ命せられ一宇を創建して圓福寺と号し終よ檀林職と爾うめふ永く大法幢を樹大法鼓を撃夏冬廃ることなかるべし云々

（此旨ハ今も圓福寺の門前よ掲示あり）

縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺り化の時當社の本地将軍地蔵尊の像を彫刻しまつり後安部内親王よ奉る第四十六代孝謙天皇の御ときなり

（其旧跡を今も宮村と名つく）

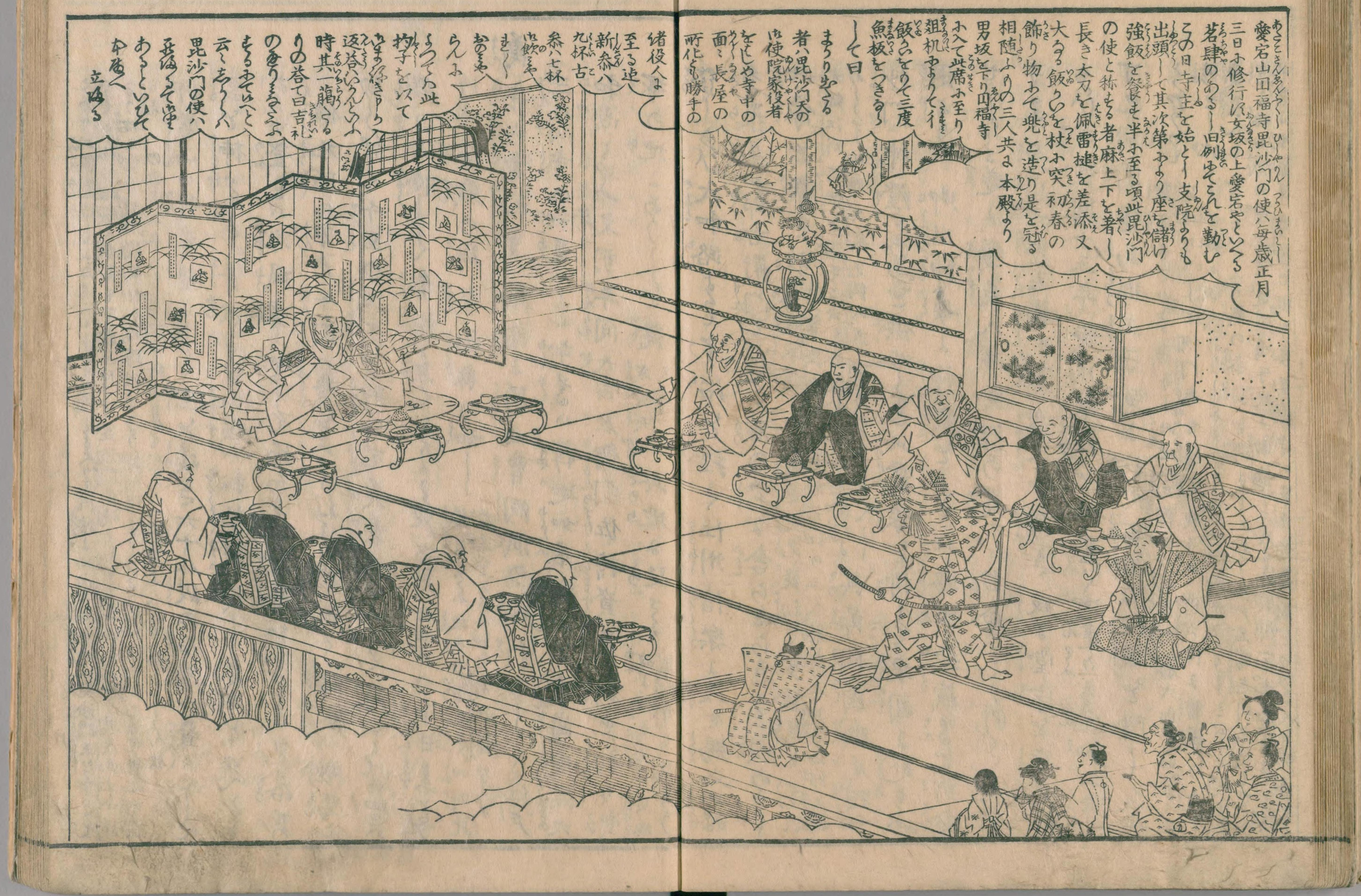
然るよ天正十年壬午の夏台棋泉州を發しまひ大和路より宇治を経て江州信樂よ入せ賜ふ此時多羅尾四郎右衛門といへる者の宅よ舎らせらるる頃あるに此像を獻せ其子常陸介綱和三好若江の三人衆といへる其子四郎兵衛光綱江州信樂を領し多羅尾八四郎左衛門ハ其節同國磯尾村の

（多羅尾家譜ハ左京進光俊初め多羅尾と号し光綱江州信樂を領し多羅尾八四郎左衛門ハ其子孫なり）

あるよ四郎兵衛光綱入道道賀のすなるへし此霊像を持して東國よ赴ふ雨よりの御出陣毎よ神燈をせしめる遂よ慶長八年癸卯の夏子年石川六郎左衛門尉當山を開き假よ堂宇を造建しまひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立ある元和三年丁巳同國豊島郡王子邑よ於て百石の社領を附しまひとなり

（惣鹿子といへる冊子よ此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といへる人の宅地なり後ち仁伝ありふよりて當社を御建立ありしと云ふ又同書よ慶長八年九月廿四日貴賤の忝詣を許し給ひ又爰よ始山城の愛宕を遠州鳴子坂よ勧請し慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といへる人の勧請なり）

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

圓福寺より云ふなく證とすべき此説
今も本社の相殿より安置を毎歳正月三日毘沙門天
うち按ずるに當寺開山俊賀師ハ始野州辺
日光の古式を准ふて當寺より行ふのも恐らくハ俊賀上人より始るなるべん欤

抑當山ハ懸岸壁立して空を凌き六十八級の石階ハ疊々として
雲を挿んでやく貸然たり山頂ハ松柏鬱茂して夏日といへども
さらに登るに涼風凛々やく炎暑をさそる見落せば
三條九陌の万戸千門ハ甍をつらねやく所せく海水ハ渺茫と
して千里の風光を貯へ尤美景の地なる月ごとに廿四日
緣日と称してやく参詣多くとりわけ六月廿四日ハ千日参と号
けく貴賤の群参稲麻の如し

萬年山青松寺 同南に隣る曹洞派の禪刹なり
三箇寺の一員にして本尊ハ釋迦如来開山を雲崗俊徳大
和尚といへる文明年間太田左衛門佐持資草創せし初を貝
塚の地なりしを後或云天正 又慶長 此地に迁さる

一ノ 青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐
と云人草創せし其旧跡ハ糀町の貝塚當時玉虫八左衛門佐持資草創せし屋舗なりく
彼墓と甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりとそり又當
寺ノ太田道灌の塚ありとそれ詳ならず

當寺の後の山を含海山と号くして眺望愛宕山より芝の景の
地なり惣門の額万年山の三大字を閩沙門道霈の筆

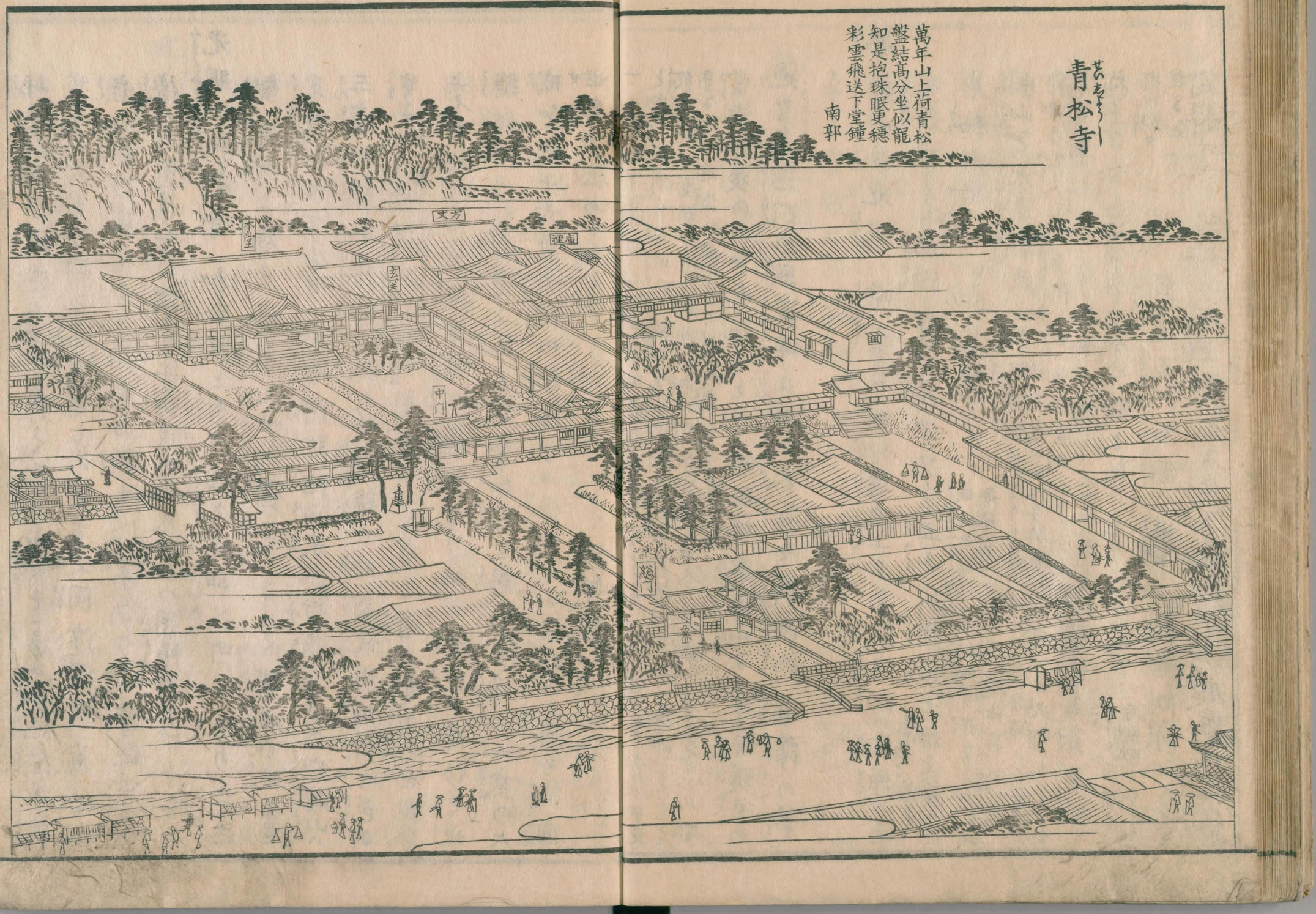
勝林山金地院 増上寺の西切通の上にあり京師南禪寺の
塔頭やく南禪寺より宿寺なり五山の僧録と称せしハ
唐佛の聖観世音菩薩なり
開山を大業和尚と云其頃碩学
都留の毛衣と云草紙に古ハ寺社裁許の訴訟を決断せしむ
寛永中より武家の職となる云く

或人云宋人陳和卿作なりとの説
毎月十八日観音懺法修行す

境内ハ青葉樹と称する古木あれどもいつの頃の物やく後此地へ
栽ると 閻魔王ハ石像ハ塔中二玄庵の前にあり
宝永の頃南部の領主霊仏ニ依やく彼地より麻布の別荘ニ

青松寺（せいしょうじ）

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭



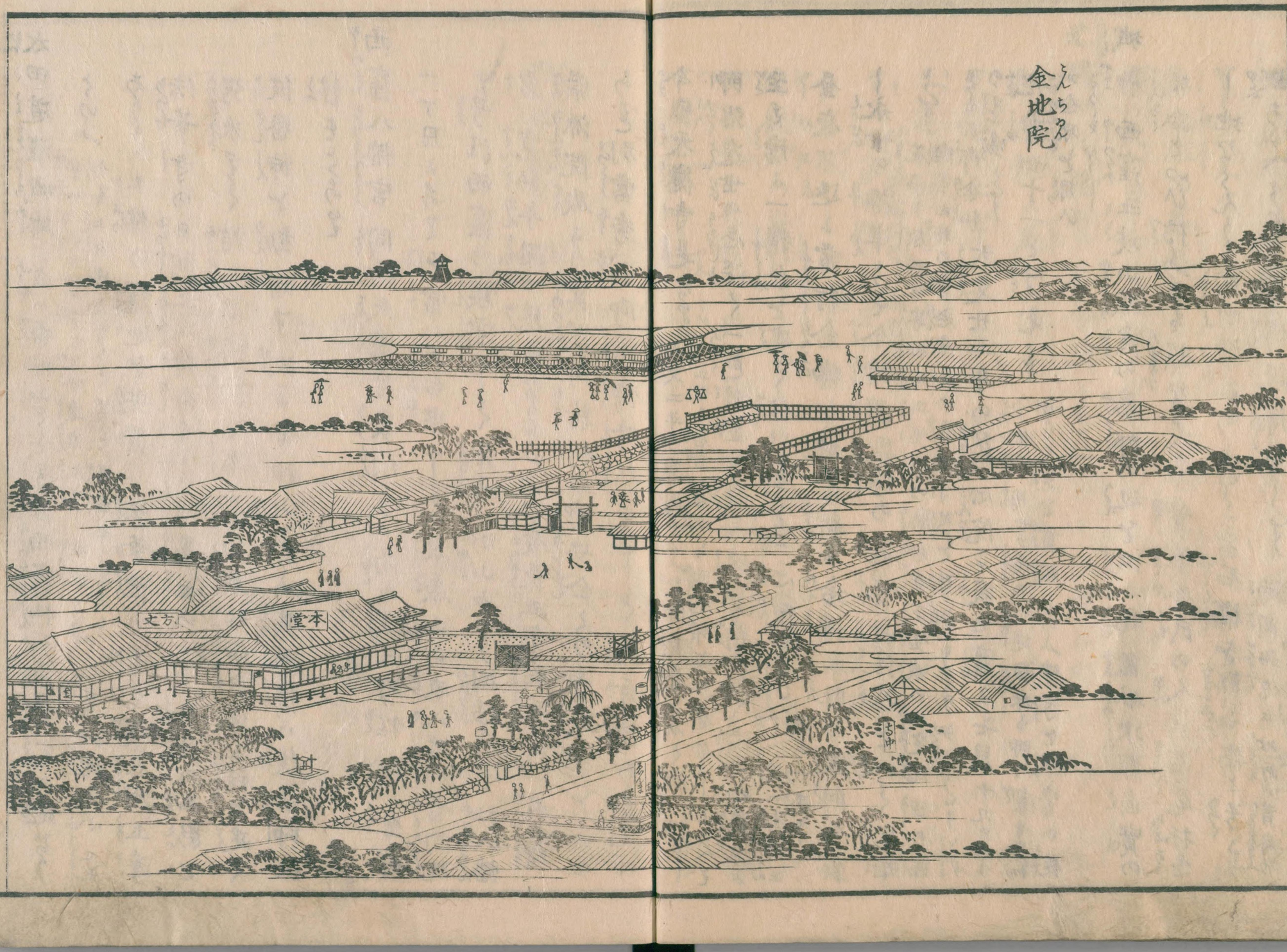
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

迂され再び威霊あるふよりく又こゝふ
せ〳〵三大字の額を水雲寫とあるを方丈同津溟筆薦福殿
岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の
像八大の月三月續る中の月の十八日ふハ閑帳あり

光明山天徳寺　和合院と号ス西久保神谷町にあり花洛
智恩院より属を浄家江戸四箇の一ゆ〳〵紫衣の地なり
支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ
三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑ふ
生る父を藤田左衛門尉道昭と云母ハ冨永氏或ハ云冨田氏
九歳にして増上寺第七世親誉
上人より得度し雑染を聰明絶倫なり師の遷化より及ひく北
總飯沼の弘経寺より至て鎮誉和尚より謁し〳〵浄土一乗の大
戒を受十六歳岩附の浄國寺ふ住し大より法輪を轉を志猶
世塵を厭ふ後古郷より帰く天智庵（或ハ又地より作る）を草創
今の天徳寺是なり　天文二年の草創なり〳〵と云ふ先師親誉を以て開山祖と
師弥遁世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひ〳〵浴の知恩院より
至て傍より一精舎を建く住ひ是を一心院と号ス（一心院ハ念仏三昧の一本寺）
昼夜不退より常行念佛を修し新より念佛三昧の法則を製
し永世の標準とそ今諸國厭悠の道場此法式をひく定矩
とす　花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院（挂の極楽寺田井の會念寺淀の念佛寺皆是草創なり）
（ともに不断念仏の場とす）
化壽四十一と又ゑし　天文廿三年の秋一心院より寂せ實より七月十九日の
此念珠を用ひ　今世間用ひ所の二連數珠も師の製なり和
城山西窪土岐山城庵の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の
城跡といひ傳ふるを誤なるへし肯熊谷氏の人此居宅抔そ
し地なるへし同所神谷町よりかるゐの石橋を熊谷橋と号るも
故あるへしと今傳説洋なるへし　菊岡沾涼云此所ハ昔麻布
殿とやの出丸の地なるへしと云

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

金地院（こんちいん）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

太田道灌城跡　或ハ番神山とも号ク又西窪仙石家弟宅の地なり

（紫の一本よもぎ　今も土取場　堀崩せしと云ク）

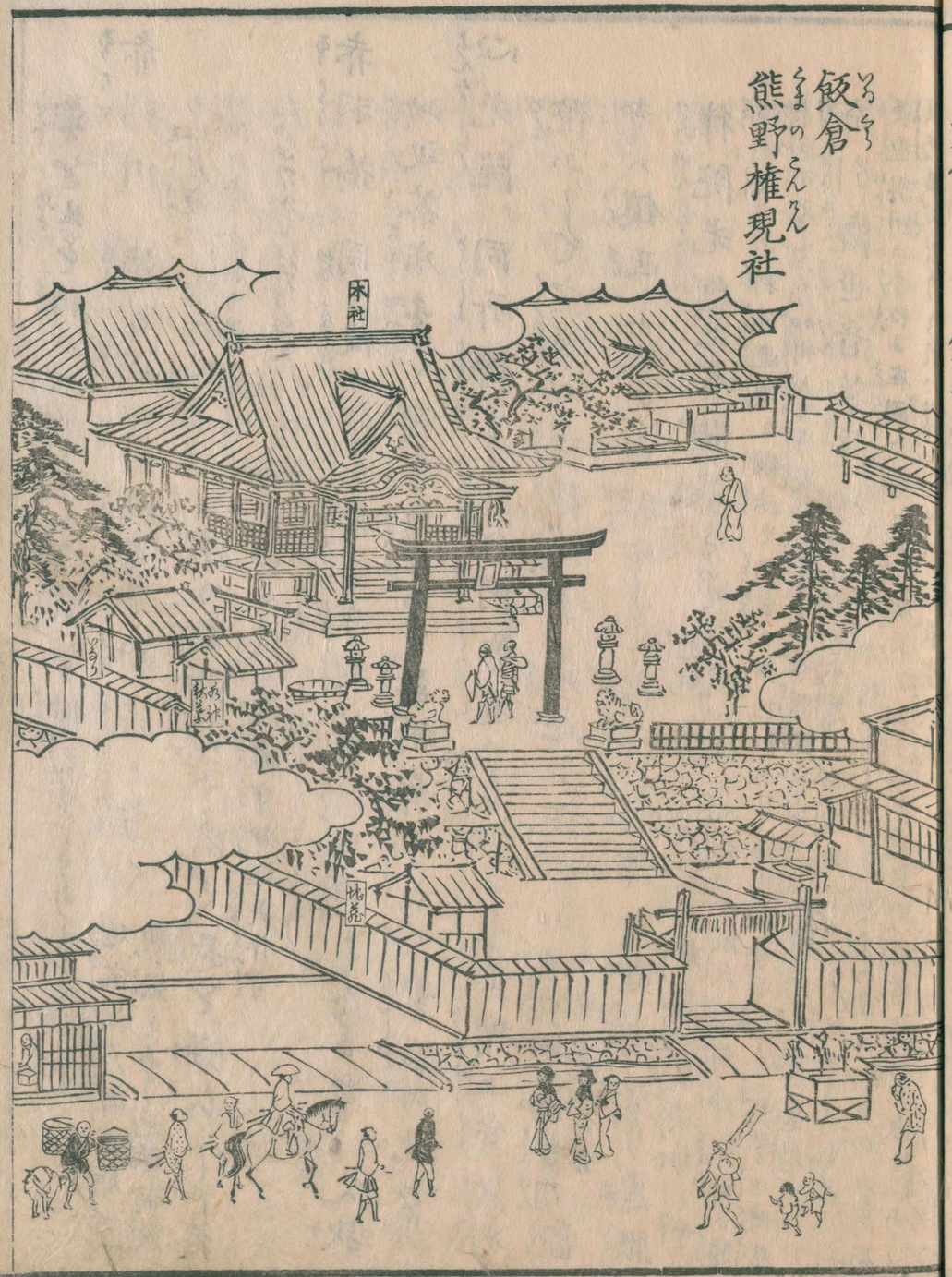
太田道灌取立ノ城地なり

ありく土佛の釋迦を安置ス　法華堂と号ク後豆州玉澤法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影を携来りく偕人を結縁せん為ニ小田原北条氏ノ後ち社を建くり移をとゝめ

彼番神を勧請す故ニ番神山とらゝ　其画像ハ後京師に

西窪八幡宮　同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町一丁目よりあと別當ハ天台宗ゆゝく東巌山の末八幡山普門院と号ク西窪の鎮守ゆゝく旅所ハ小山にあり　相傳ふ當社八幡宮ハ寛弘年間の鎮座なりとゝも慶長五年関原御一戦の時崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をあめらと別當秀圓御祈禱修行をゝゝく其奇特ありくれハ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



飯倉
熊野権現社

寛永十一年甲戌二月終ゟ宮社御建立あるゝとそ祭禮ハ
毎歳八月十五日なり

飯倉　西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地なる
ゆへ其御饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へいつしか
地名ゟ呼るゝなるへし

永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫地を領せしゟ北条家の所領飯倉の地あるゝハ往古飯倉の地の廣
所の北条家人遠山丹波守又駒込吉祥寺ゟ蔵ゟ同書ゟ飯倉の内櫻田と
の地を彼寺ゟ寄附せし状ゟ飯倉の地名あるゝ
箕輪大蔵ゟ寄附せし地なりとあるゝ猶前の芝神明宮の条下ゟ照合せ考へ合
鳳翔東鑑等の書を引摸すに飯倉町ゟあるゝ或人云養老年間芝の海濱に
熊野権現宮勧請あるゝを遥の後今の地ゟ移さるゝとそ別當ゟ三集山
正宮寺といゝ天台宗にて東叡山ゟ属せり　毎年六月朔日ゟ三日まて祭礼を修行を
勝手ゟ原　土器町ゟ赤羽へ出る廣小路の辺をいゝとそ昔ハ三田の
方へうけく廣漠の原野なりしゟハ太田道灌江戸の城ゟ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

勢を出す時は此所みち人數を揃ふ

赤羽川　渋谷川の下流なり新堀と号く

この江戸鹿子といつる冊紙より此河の上を赤羽の池と云あり江戸名勝志より溝口信濃守伊達美作守たるものゝ両家の別業を兼ねられしとあり

元禄の始釣命かよりて是を堀らしめ

赤羽橋　同し流より架す按るに赤羽は赤埴の轉したるなるべし

此辺茶店多く河原の北にあり毎朝青市立て繁昌の地なり

心光院　同所橋より北の河原道より右にあり

院ふるく宝暦の頃豫山より此地へ移さる

寺は鎮西上人の古跡ゆゑに常行念佛の道場なり恵照律院光阿上人開基なり

光阿上人は横連社縦誉心岩頑夢と号し加州小松の人姓は加彼氏越前浄光院の隠寮にて八月晦日當寺にて寂す由傳燈録に載せたり

布引観世音菩薩　其旧地は涅槃門當辺なりと云

境内に安置本尊は馬頭觀音長一尺二寸慶長の頃丹羽五郎左衛門尉代々信心不断念佛の道場を構む増上寺の行者の馬に乗て奉持せるとぞ

長重奥州二本松より在國の時ある日城下より熊野道者の馬に乗て来れるを見て其名を馬

道者と唱へ後は大將軍家へ献せる駿を追せのぼり両方より附のぼり彼布一文字を翻す故よし改て布引と命せられしとぞ

彼馬斃るの後増上寺境内より埋めて石塔を本尊として馬頭觀音と称し宝暦の頃寺と共に此地へ引れしとぞ

竹女水盤　新著聞集に云江戸大伝馬町佐久間勘解由殿に召仕の下女たけは性仁慈の志深く朝夕の飯米己が分より毛厄人に施し其身は常に粟の飯を喰ひ其溜りを以て水盤の角に置き洗ひ流しの飯をうけ後は大往生を遂し水盤は今増上寺念佛堂心光院の門の天井に掛けり彼竹女が常に粗をあらひ置し件の水盤より光明を放ちしとぞ

芝浦　本芝町の東の海濱をいふ芝口新橋より南田町の邊迄惣名なり上古は芝を竹柴の郷とゝのへ呼来りしも又文字も芝と書改さるゝ更級日記に竹柴の浦三田清海寺の条下に詳なり南向亭云芝とは海苔の小枝を柴といふの義なり海苔をとるを元禄草の辺の地名ありよし

近き前に柴を建海苔のかゝるを取ふ木の小枝なり

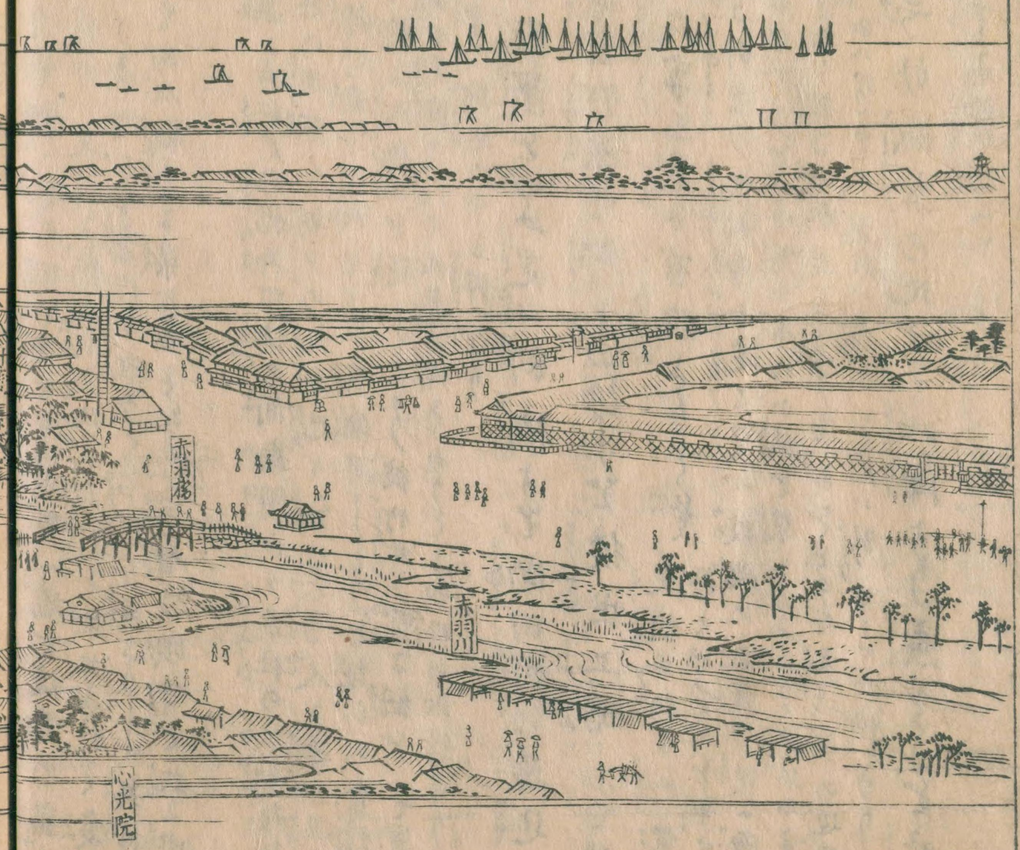
後芝と改作ると云く按に此説是なるべし

昔は今の品川あたりまでも此海苔を産せるを芝と称し都下の賞せる此地を雑魚場と号け漁猟の地

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

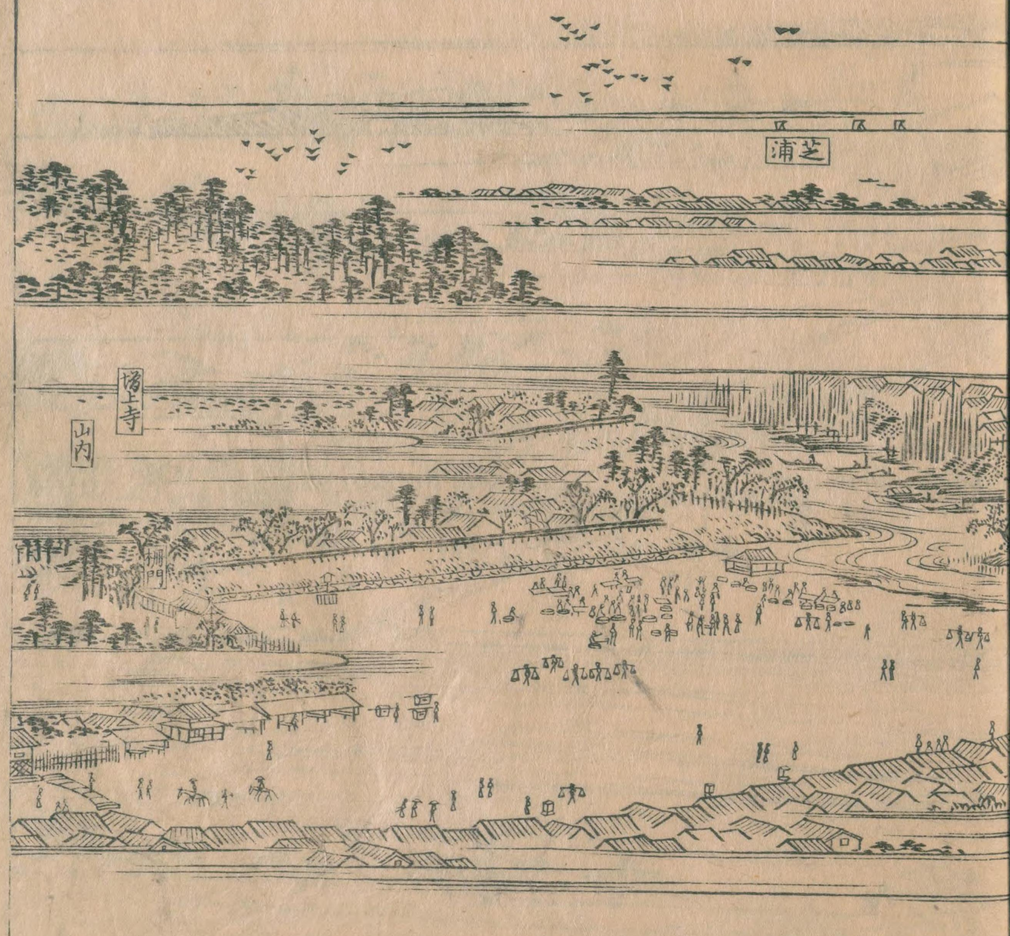
ガラス使用

赤羽（あかばね）



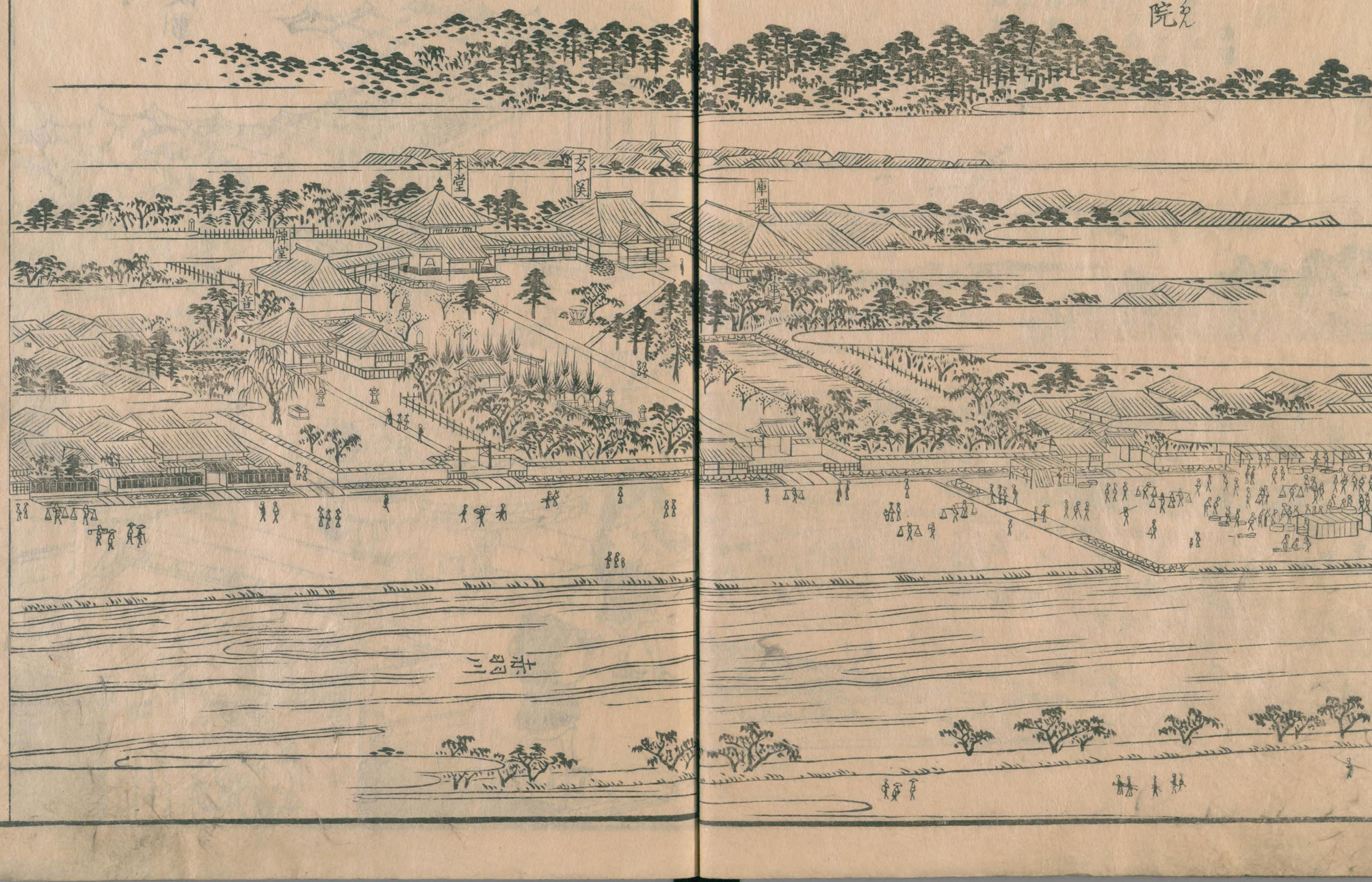
丹鳳城南赤羽濱
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀墓色
麻谷流侵碧海春
客裡禊家羞白髮
人間ト地避紅塵
少年車馬休相訝
沐罷聊裁頭上巾

南郭



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

赤羽 心光院



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

竹女の故事

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

霧しーくき道の芝生を踏ちらし駒ゟ任もるあをくれのをや

やそうり藻汐の煙名ゟ立舟にこりつゝひ芝の浦人　道奥准后

此浦を過くあら井といへる所ゟて云く

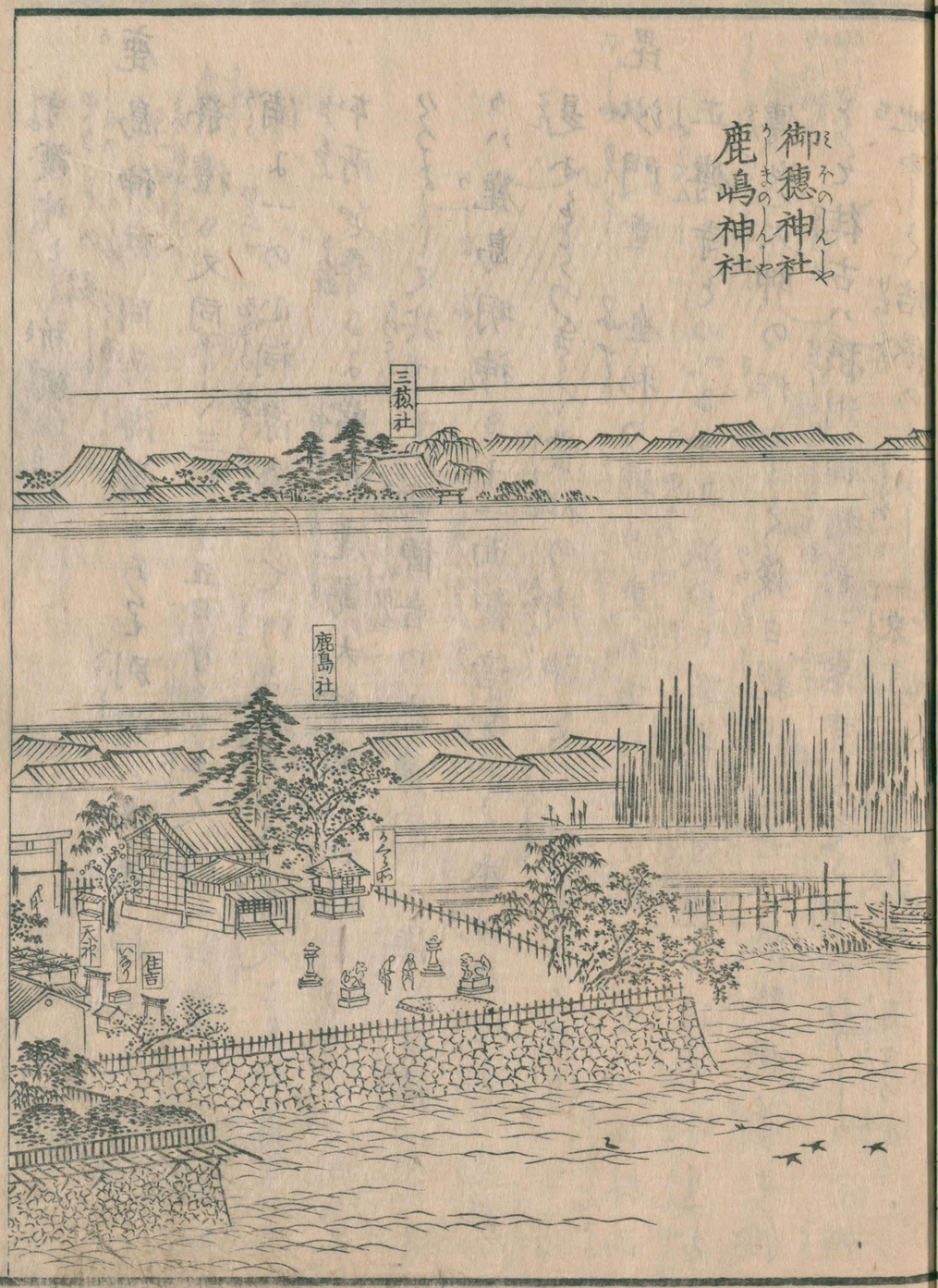
江戸ゟて

芝といふものゝ候夏さしらし　梅翁

御穂神社　同所ゟ芝通りゟ西の横町ゟある本芝ゟ

産土神ゟくく祭禮八三月十五日なるも別當ゟ正福寺と号す天台宗ゟて東叡山ゟ属ゟ侍へ云往古駿河國三穂の海人此浦ゟ来ゟ住ゟ故ゟ古郷の御神あれをとゝて文明十一年庚子のとしゟ當社ゟ勸請せしゟなり祭神御穂津彦御穂津姫ゟ二神なりといへる

土俗當社ゟ遊廓の



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

守護神と祈願
鹿島神社 同所海濱よあるを別當ハ御穂神社に相同し
祭禮も又同しく三月十五日なるも土人傳へ云寛永年間此
浦よ一の小祠漂流して汀よ止るあり漁人ことを揚く其
本所を尋るよ常州鹿島大神宮の社地よりして小祠あり
くるまより又其頃十一面觀音の木像同し海汀よ流よりそし
うハ鹿島明神も十一面觀音をいく本地佛とせしかれハ
是かととつきく當社の御神を勸請せしとなり
毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路よあり 松林山
正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境よひろし本堂も
傳教大師の作ゆく後日親上人再び黙眼供養をなし
とそ往古ハ摂州堀折邑一乗寺といひし真言の密場なり
一乗寺ハ金仙寺といへる寺ゆありしとも僻
地ゆく結縁の人少し

依て寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し建るとぞ
霊験感應の著しきより寺記に詳なり故に叅詣の貴賤日々
多く寅日を殊に群集せり二月二日の寅日叅詣の人大方ならず帰る輩あり
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ二月初の寅日詣る輩
遂石を貰ひ家土産とこれを春ごとに祭れば
霊験著し

田中山西應寺　金杉の通より西の裏にあり　浄土宗

門前を西應寺町と云

宗中にて三縁山と属を支院三宇ひら本尊阿弥陀如来
の像は慧心僧都の作なりと云伝ふ應安紀元戊申の年明賢
上人草創を明賢上人は應永五年戊寅黄鐘天心の頃大将軍家
当寺に駕を枉させられ寺領御寄附あるにより学徒朝夕
の助覚ゆるに学道盛なり又當寺十六世存問和尚一
宗に碩学ゆゑに當時法門の龍象学道の麟鶴なり
これは大将軍家深く崇敬まします故なり

依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧は宗風の法意を
示をすゝめ念佛三昧他力往生のをしへ日々に大いに弘まり
三田或は御田及び箕多と作ると

和名類聚鈔云　荏原郡御田云
武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷或箕多
公叅三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵〔〕
等亦有諸禽允大膳或木工寮云

細坂

同所松平隠岐奏と會津家との藩邸の間を寺町へ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

小山神明宮

下る坂を号く　惣鹿子は渡辺坂とあり此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと菊岡沾涼云　又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱ノ坂と号く綱ノ産湯水と云ハ同所肥後矦の園中綱ノ駒繋松と称するハ隠岐矦の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内よあるを

按ニ窪三田ノ綱生山當光寺といへる一向派の寺あり渡辺の綱ノ出生の地なりといひ又三田八幡宮の神躰ともへり此辺綱ノ縁あるもの多し倉津家の別荘も綱ノ守護神ありとして塚と称するの塚工の松と懐古松と号けしも其器ニ云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田郷ハ源綱ノ陳跡なり仕とへし此所ノ塚工ノ松を截く遺蹤を標せ則是ある事明暦四戊戌の夏倉津源公此地の塚を発ハ盖其勇を取り古の士を賜ひ別荘とし尚ほ数百の星霜を歴とへども其塚ノ形存せり千歳の餘情伐ると云く紀されしと此地ハ箕田ノ前の三田の条下ノ詳なり照合せ考へし

小山神明宮　同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり

神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号く此所を

飯倉神明宮の舊地とするハ誤なるも

三田
春日明神社

春日明神社　三田一丁目よりあるも別當を三笠山神宮寺と号す和州三笠山春日四所の御神を鎮座なしまゐらせ三田の産土神ゆゑ例祭ハ毎年九月九日よ修行を倩へ云當社ハ村上天皇天徳年間武藏國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なるかよ此御神を此地よ勸請せしむるとなり其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を十一面觀世音ゆゑ弘法大師の彫造なるとかや慶賢瑞夢よりて感得の靈佛なりとかや

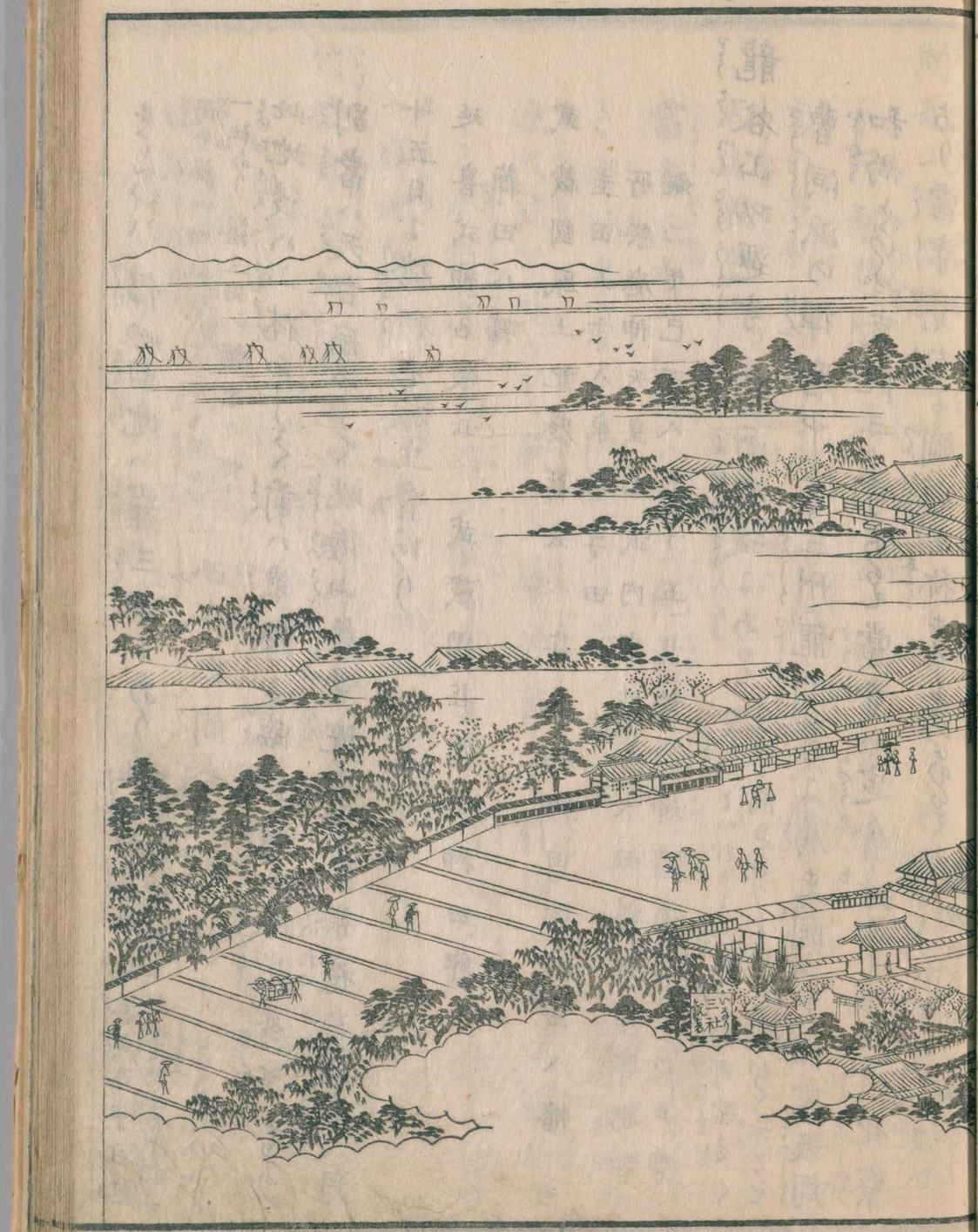
月波樓　同所松平主殿屋別莊の看樓の号なり此地より眺望實よ洞庭の風景を縮ゑるかごとく岳陽の大觀を摸よ似せしも依て城南の勝地とそ羅山先生の東明集よ詳し

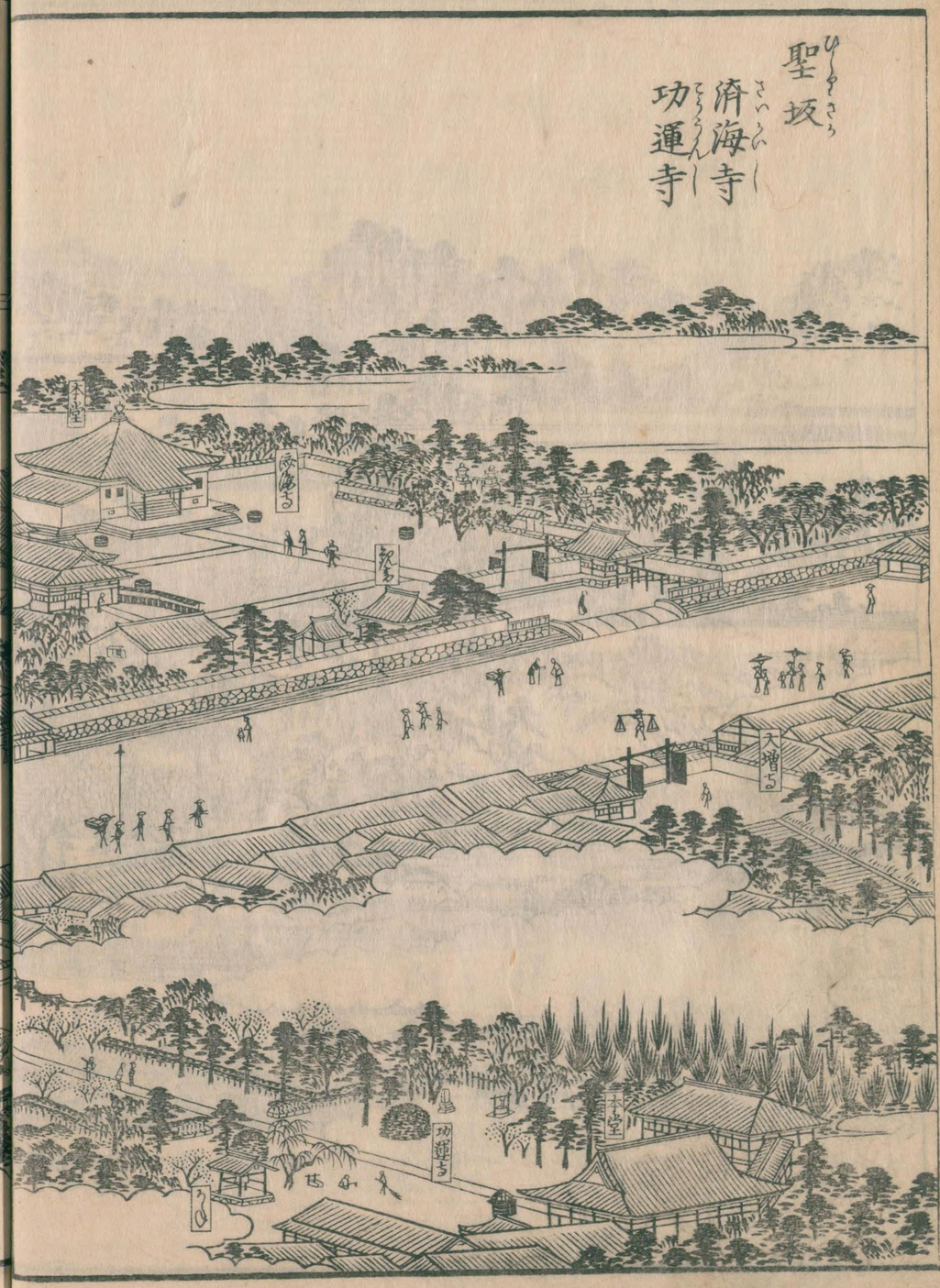
三田八幡宮　芝田町七丁目よあり三田の惣鎮守ゆゑ祭禮ハ山城男山八幡宮と同くし後一条帝寛仁年間草創

三田八幡宮（みたはちまんぐう）

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

聖坂
済海寺
功運寺





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

もとの地ハ窪三田よりあり
所の鞆田神社是なり今も其旧地よ
り一社あり窪三田八幡宮と称す
此地後ハ山林ゆゑく前ハ東海を臨む故ふ風光秀美なり
別當ハ天台宗ゆゑて眺海山無量院と号く祭禮ハ隔年八月
十五日よ修行を放生會なり
延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷
鞆田八幡

武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷稈田八幡
圭田五十八東三字田　祢荒木田襲津彦等也和
所祭應神天皇也武内宿祢始行神禮有神戸巫戸等
銅二年己酉八月十五日

龍谷山功運寺　同所聖坂よあり
曹洞汎の禪窟ゆゑく三州龍門寺よ属を開きさうし云とそ
和尚ものふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地ふしく所化寮
あり當寺境内よ綱塚と称するものあり

周光山濟海寺　聖坂の上道より左側よあり浄土宗にしく
京師智恩院ふ属を上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真
言の古刹なりしが中古荒廢よ尚中興を其庭海岸よ臨む
沖より目當の燈籠あり
當寺庭中の眺望ハ實よ絶景なり房總の群山眼下よあり
く雅趣をくなうし朝夕よ漂ふ釣舟ハ沖よかく暮て數點の
漁火波を焼ふ疑る羣芳發して緑陰深く風露爽かに
しく氷霜潔し四時よ觀をあるく風人の眼を凝しむる
一勝地なり月の岬とものを此辺の惣名なり
竹柴寺舊址　濟海寺と同隣の土岐彦の邸地其舊跡
といひ傳ふ　山岡明阿云按よ今の地ハ海辺よりくる岡の上なれハ更級日記
の浦ふこの邊ふくあるハ昔ハ外よありしと云ふ
更級日記云
今ゝ武蔵國よなりぬ殊よをゝきもえゝす渚も砂な

白く波もなくこひぢの様ふく紫生と聞野も蘆荻のを
高く生て馬ふ乗ふく弓をくる末見えぬと高く生茂りて
中を分行ふ竹柴とふ寺あを遥ふいくさろうやふ
所ふ樓の跡礎なとあをいふ竹柴とふさうなり國の人ありるを火焚家乃火
焚衛士まさし奉りなるて御前の庭を掃とく
あやや苦しきあをみるとふ舞我國ふ七川三つ造り
居る酒壺ふちし渡しふ蝦の南風吹ハ
北ふ靡き北風吹ハ南ふ靡き東ふ吹ハ西ふ靡ふひくを見くかくあるよと獨こもつふやき
ほを其時の帝ふ御ひもを給いみしうかしこまりて
そまふ只獨り御簾の際ふ立出ふひく柱ふ寄かく
御覽をるふこともをのこかく獨こり伏いを
哀ふいうなる蝦のいふ靡なうんといみしう床しく
おぼされるまふ御簾を押明くあのをのこあちまんと
めしかしこまりく高欄のつふ糸りなるまいと
云つる事今ゑとかくを我ふいひく聞せよと仰られれハ
酒壺の支今ゑとうへり申れハ我ゐくいきて見せよ
さいふありと仰られれまハかしこく恐しく思ひ
それとさるへきふやなのまんおひあてまつりく下るふ
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋ふりと
ふ此宮を居さてまつりて瀬田の橋をひとまもるを
こほちく夫を飛越く此宮伏かきおひ奉りて七日
七夜とふふ武藏國ふ帝石御子
うせなひねとおほしまさしめ
國の衛士のをのこなんいをかうえしきりのを首ふ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

竹柴寺古事

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

引うけく飛様よ逃ると申出く此をものことを尋るふなうを
くを論なく本の國ふこそ行らあと公うを使下りて追ふ
勢田の橋こほまをく得行ゆきす三月とゐよもさしよ
國ゐいきつきて此をものこ捉尋るふ此御子公使をめしく
我さるへきみやありくん此男の家ゆうしくてゐく行と
いひしうゐく来ていこことあろうく覺ゆこの男罪
しきうせしくん我をいうそてあれと是も前世よ此國よ
跡をそるへきまをくせことありくやや歸く公うり此
しくを奏せうと仰らまくくのわりく
御門よかくなんありつると奏しくん云うひゐしー其男
を罪しても今ハ此宮をとをとのへしー都よかへしー奉る
をきゐをあしす竹柴のをものこよいけらん世の限を
むさしの國を預とうせく公事もなさせしたく宮よ
其國あつけ奉らせ賜ふ宣旨下るくん此家ハ
内裡のことく造りく住せゆひふくれハ寺ゐなしー
うせゆひふくれハ寺ゐなしーうを竹柴寺ゐ
なるく云く

亀塚

濟海寺の北よ隣く隠岐家の別荘の地よあり
昔ハ竹柴寺の境内なりしを津國の項地を割く隠岐家の別荘
なりしふ此時亀塚ハ隠岐家の内よ入りしとそ其塚の
建られる亀塚の相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地よ酒壺
碑と称するものあり
其ふ一つの靈亀栖を後土人崇めく神よ祀まり
いつの頃ゐあるくん或時夜をくく風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石よ化せりと云又文明中大田道灌此地ふ
午候を置其亀の靈あるをとくく
祖徠先生墓 濟海寺の山号を昔ハ亀塚山と唱へしとそ
今ハ土人ハ亀塚の濟海寺と呼くる浄家の境内よあり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

魚籃観音堂（ぎょらんかんのんどう）

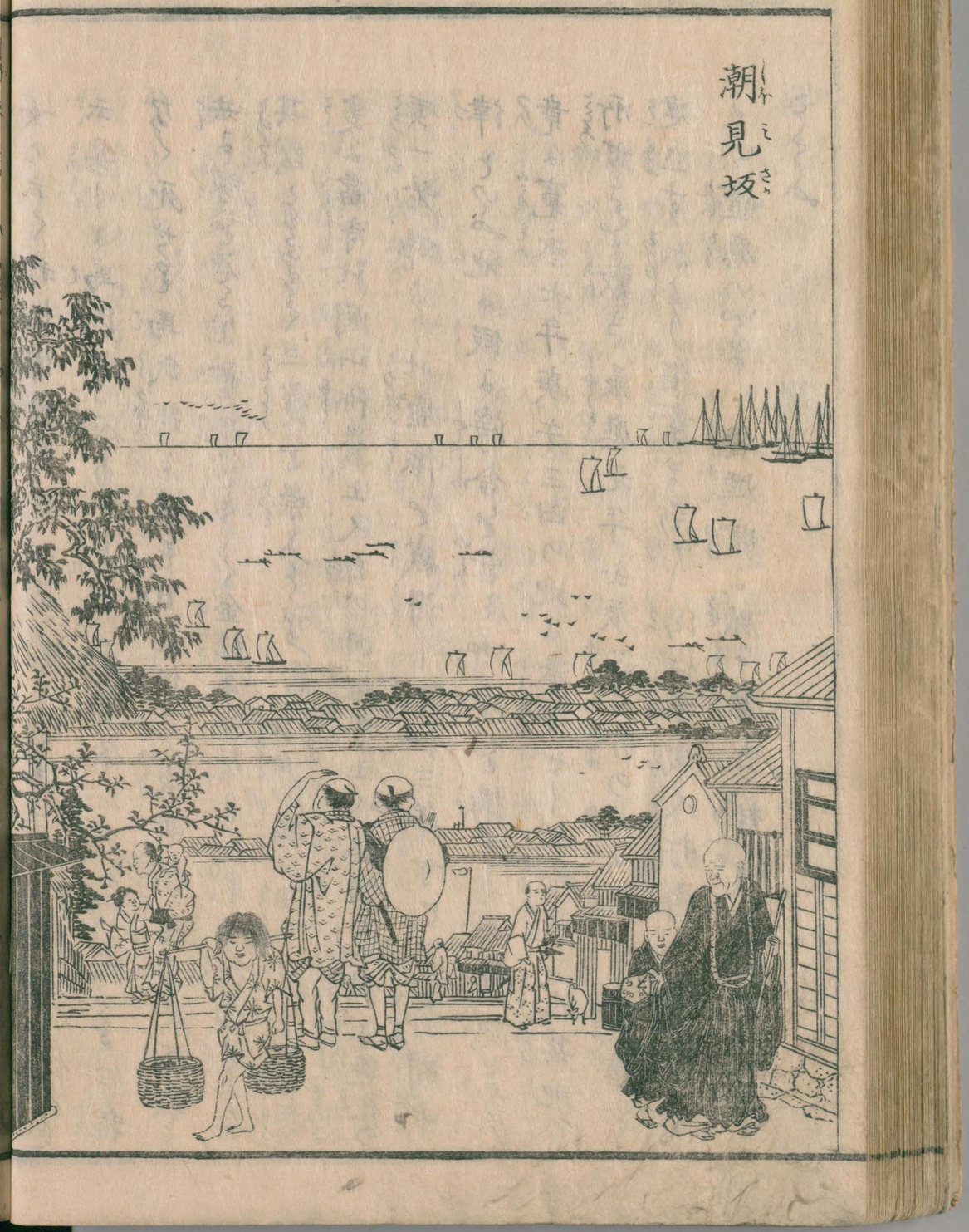
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

碑文ハ猗蘭侯撰ス

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之升也乃影之及所不照其朦行狀弟子茂卿字ヲ行ル一号ヲ蘐園ト云ヒ先生ノ没後南總ヨリ遥ニ書ヲ寄テ銘ヲ請フ嗚呼先生復學於古歸道崇名亜於陸

潮見坂



潮見坂

聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼しと云按ニ潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒蘭崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を合せて七崎といふ

伊皿子藥師堂　潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり

王山福昌寺と号し天台宗城琳寺ニ属す

本尊藥師佛の像ハ智證大師の作ゆゑ右大將頼朝卿の念持佛なりしとぞ往古相州鎌倉の佐介谷にありしを藥師堂とゝもに其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地へ移しを今の地へ安置せしとぞ

今鎌倉佐介谷ニ藥師堂跡と字する地あり其旧跡なるべし

東鑑曰

建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂安置藥師如來像雲慶奉造之今日被遂供養導師莊嚴房律師行勇兒願圓如房阿闍梨遍曜堂達頭覺房良喜供若宮僧也施主並室家等坐簾中按ニ東鑑此藥師佛を運慶の作と記せしハ誤なるべし寺傳智證大師ともに又東鑑ニ右京兆とあるハ北条右京太夫義時のことなるべし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

伊皿子
薬師堂

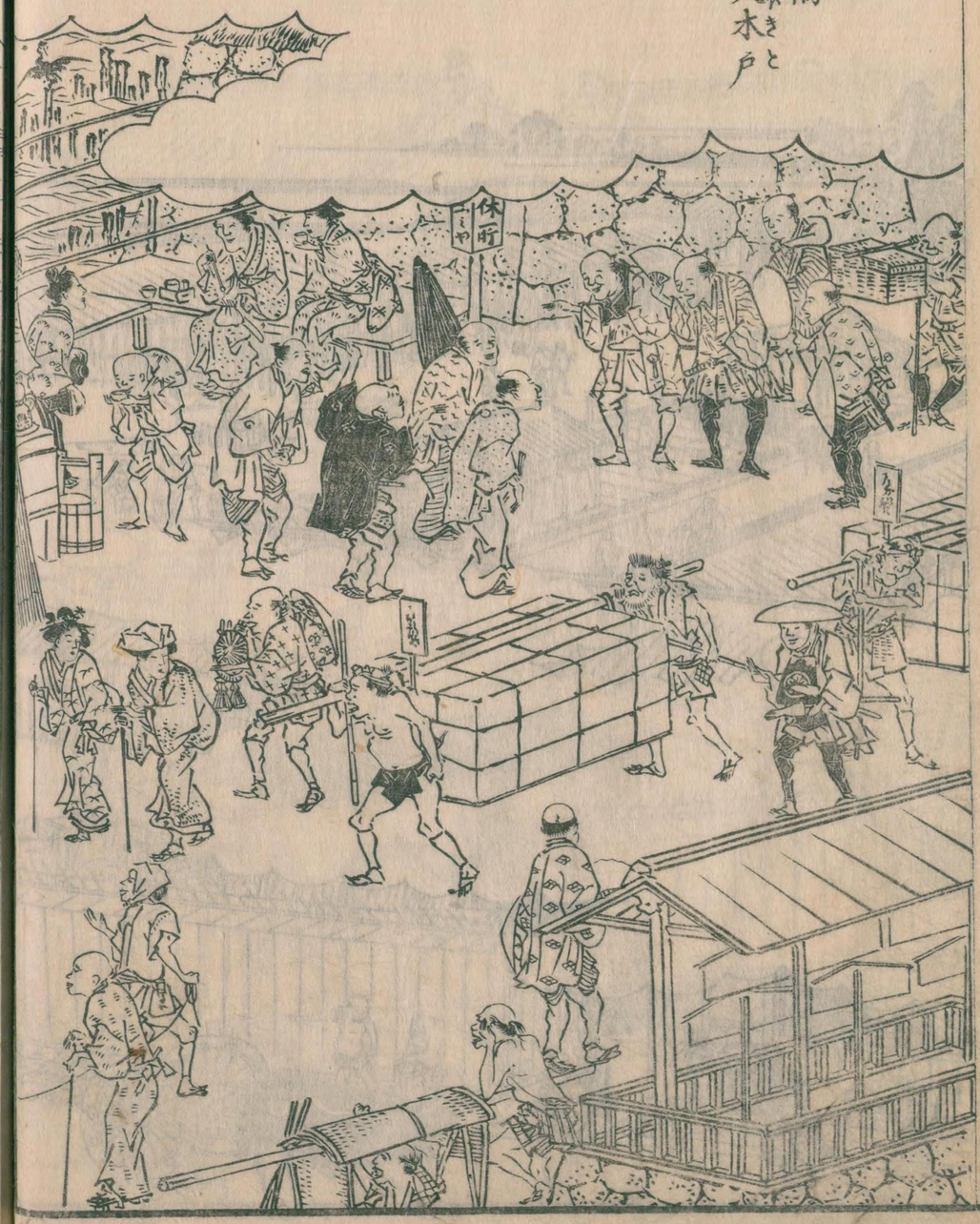
牛小屋　牛町より
延宝江戸図より此地を牛の尻と云とあり
牛を畜る家多く牛の數一千足より餘り養ふ処の牛額小く其角後より靡きふるを覆と号けく上品なるを都く牛ハ行事正しく殊より早し形婉よしく精氣撓すか量勝なるふ転をかく重を乗せく遠きに運ふ人の用を助さるふ其功誠より少ふ古ハ淀鳥羽よりおほく都の外より牛車なるふ今ハ絶ふ
江戸の町入國の頃より許有てそ江府ゆを是を用ゆるふとなりおく唯此三ヶ所より限りとふ

高輪大木戸　宝永七年庚寅新より海道の左右より石垣を築せらる高札場となりふ
其初ハ同所田町四丁目の三ツ辻と唱ふ今も彼地を元札の辻と間ゆく品川迄の海岸ありまて
江戸の喉口なれバあり此地も
肆海亭をまもりけるれハ京登りを東下り伊勢参宮等の旅人を餞を迎ふるとく来ぬる輩とふる宴を催し常より繁
七軒と云辺ハ酒肴肉

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

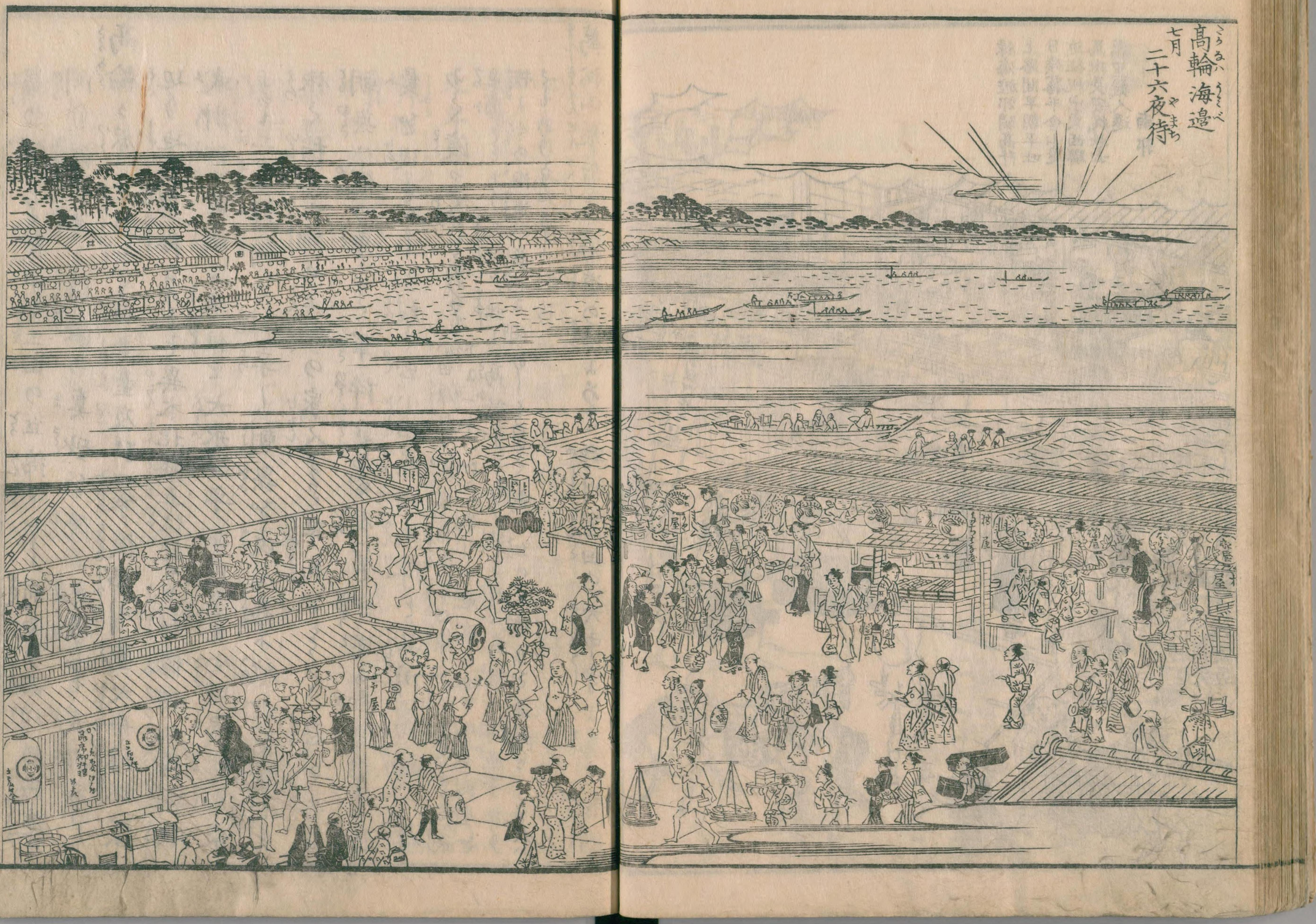
ガラス使用

高輪（たかなわ）大木戸（おおきど）



緑海旌郊関高阡
上路間早朝平吐
日殘霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭

高輪海邉（こうなわうみべ）七月二十六夜待（やまち）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

昌の地なり後ゆゑ三田の丘綿と前ゆゑ品川の海遥かに聞け渚よる浦浪の真砂を洗ふ光景をも家具あり

高輪ノ原　里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村林より辺り迄の惣称なりとぞ異本北條五代記に上杉修理太夫朝興武州江戸の城を居住を大永四年正月十三日小田原北条家より二万餘騎を引卒し朝興を攻んとふ彼地を發向せ依て稲毛六郷の上杉の家人より早馬をもて急を告る朝興ハ俄の事なれば軍評定もなく及ひ中迯と出迎ひ悉く勝負を決せんと討て出小田原の先陣と品川高輪ノ原にて渡合とあり

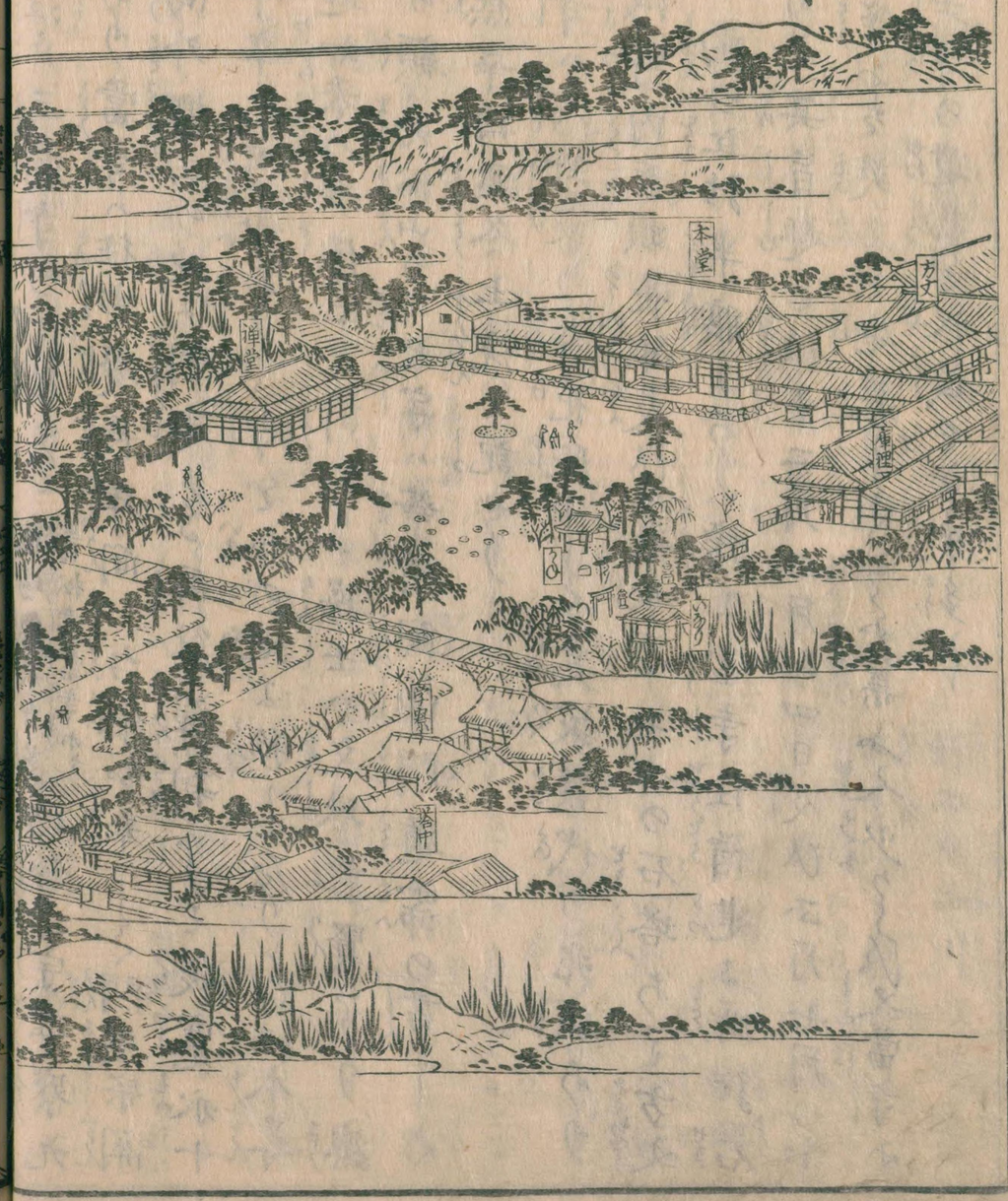
（小田原記に永禄信玄小田原を攻る時ハ高繩手とあり又江戸品川の繩手ハ江戸ノ民屋を焼く古ハ丘の上通りを通路せしなれハ追捕より今の海道ハ後世に開けしものなるべし）

萬松山泉岳寺　海道の右にあり野州富田の大中寺より屬を曹洞宗江戸三箇寺の一員なり（橋場總泉寺芝青松寺當寺ホヘ）坊舎三宇学寮九宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉りて門庵宗開和尚外櫻田の地に創建する所なり禪利なりと雖も後寛永十八年辛巳再命ありて寺を今の地に移したりとぞ本尊釋迦如来ハ座像二尺許あり脇士ハ文珠普賢なり總門の額萬松山の三大字ハ華僧圓爾道霖の書やうく康熙辛酉孟冬上浣と記せり

當寺ハ浅野家の香花院やうく其家累代の兆域あり

又浅野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔ある方丈の南の丘に半腹よりあり傍ら當寺住僧建る所なり石碑ある其旨趣を注を二月三日の四日及び正月七月の十六日等やうく英名を追慕しく義士等の遺物を収蔵するもの多し

せんくわい泉岳寺



浅野家の義士をいつくしむ

其角

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を双傷し及ぶまゝ長矩は死を内蔵助良雄本國播州赤穂より在く君の讐は共に天を戴へらんと云の義ふかく血盟を以く同志の者を語らひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至り義士四十七人義英の所在を捜し其首級を得當寺に至り亡君の墓前に祭るの後誅を待く翌十六年二月四日自殺せしより諸書に詳なるを省く

歸命山如来寺　大日院と號し泉岳寺の南に隣る天台宗にて芝の木食但唱師の彫造なり但唱は佛工中興の人にて妙を得故に佛と稱し奇特の佛と号せり京都鳴滝の五智山より安置せる所の石像の五智如来十三佛等は但唱の作にて并に自の像も亦作なり

摂州有馬郡高須村の産なり彼所より亜龍山與勝寺と云古刹なりしを再興し如来及び自の像をも彫刻し安置せり　其母有馬藥師に祈請して是を設く三歳にして江戸に下る寛永十二年當寺を開創して五智如来の像を作るとなり

木食但善の弟子となりて夫より後信州檀特山に籠り百日の中に念佛三昧を修得して向の峯に三尊の影向を拝し同國浅間嶽及び南紀の那智山等に籠るまゝ各百日宛又南海北溟の間を普く周り諸の奇特を顕すこと多し後江戸に下り寛永十二年當寺を開創して五智如来の像を作るとなり

卧龍岡　境内堂前北の岡を云形状を以号とせり上に天満宮の祠ある故か天神山と呼へりと

太子堂　同所旭曜山常照寺とす

太子の像は十六歳のそる容にて自作なり天台宗の寺なり聖徳太子の像

元禄年間開板の江戸鹿子と云ふ書に明暦年間越後守光長卿の臨臣川木八兵衛某故あり此所に安置しと有

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

本堂

方丈

鐘楼

如来寺

俗に大仏と云ふ

門前図

祇園

天神

秋葉

大日

地蔵

三王権現

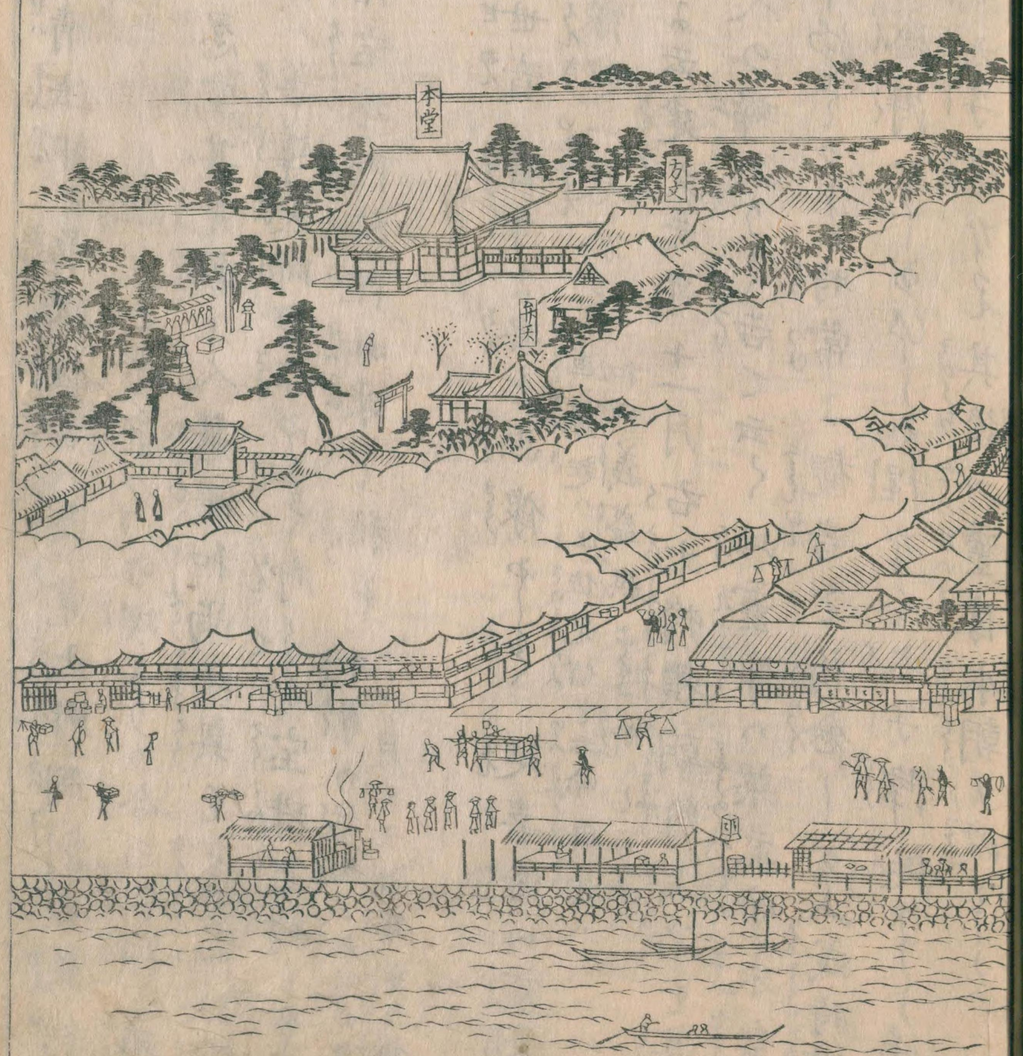
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

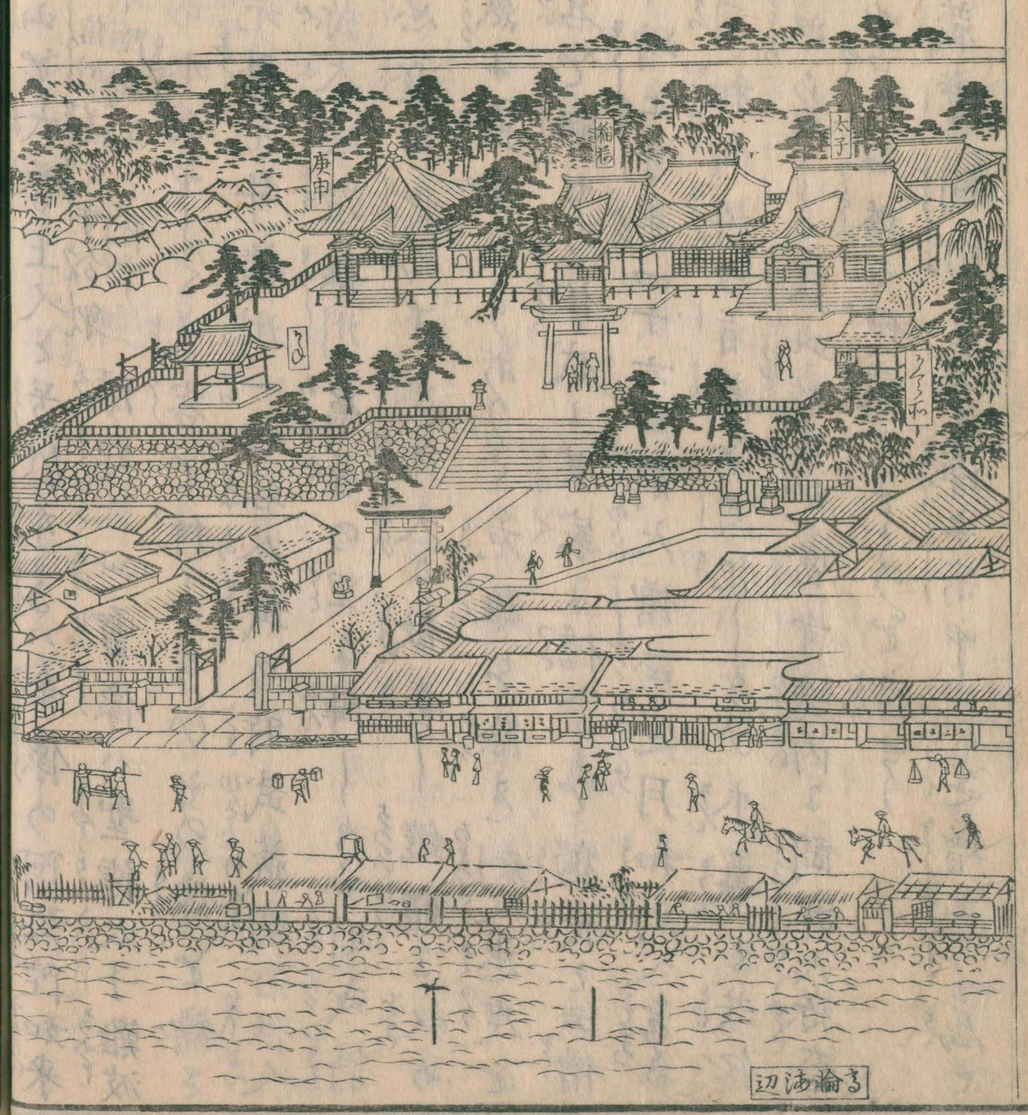
稲荷祠　太子堂　庚申堂の中ゟ並ひ立せるゟ高輪辺
産土神なり
庚申堂　同し境内ゟあるも本尊青面金剛の木像なり摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作そいふ縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ゟ一年の間六度ありて八専
の間日ゟ中もう人間ゟ三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然ゟ庚申を祭る時ハ此蟲退散し身ゟ幸を来らしめ
若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝ゟ訴ゟ今帝
釋天王衆生をあそれをゟみ故ゟ汝ゟ此法を附属も我ハ
則青面金剛なりさ又十二の誓願を示しゟへり僧都信
心肝ゟ命し直ゟ感見しなる所のる容を彫刻し普く
衆生ゟ庚申の法を授くとなり
光照山常光寺　同所北町ゟある浄土宗ゆそ芝増上寺ゟ
属を開山を大誉上人と号ハ金像の阿弥陀如来
なり　世ゟ信州善光寺分身と称す
の弥陀ゟ来と称す　縁起云此霊像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面ゆくる容を拝しゟひその像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里ゟ陣しくる時或翁
此像を忠澄ゟ受ゟす忠澄大ゟ歓喜し鎧櫃ゟ収め
出陣を然ゟ霊威のありく討く武名を顕せり依代く其家ゟ
故ありく増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ
遂ゟ定月和尚件の旨趣を自記しゟひ本尊と共に
當寺ゟ収られしといふ此故ゟや當寺境内ゟ岡部六弥太
墓と呼ゟ古き石塔の破壊せるものを存せり
珠玉山宝蔵寺　同所ゟある浄土宗ゆそ芝増上寺ゟ属も

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

常光寺



太子堂
稲荷社
庚申堂



辺海論

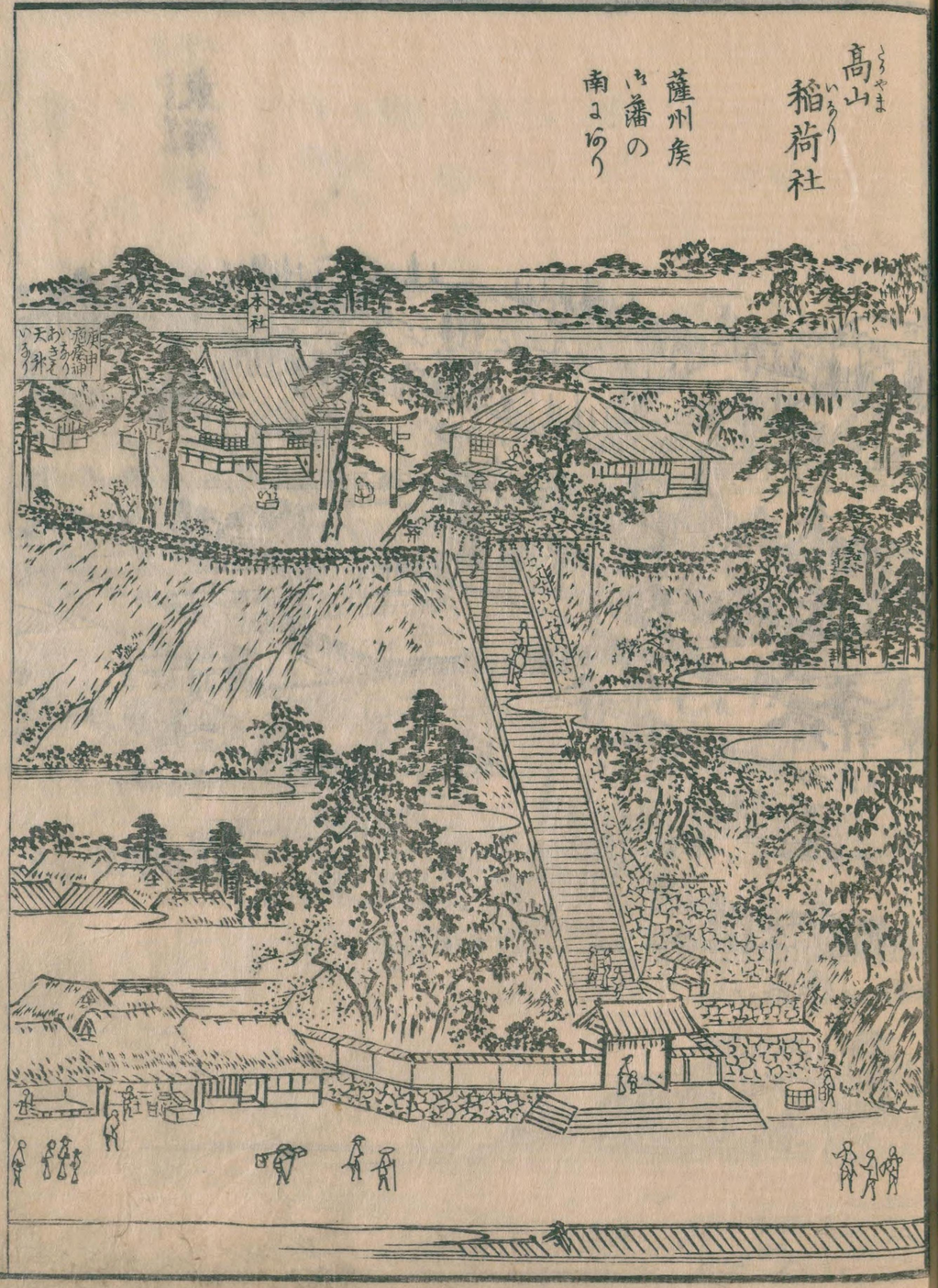
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

石神社

開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覚大師開創の梵刹
ゆゑ〳〵天台宗なりしといへども
して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を
如来の像ハ善導大師の作やゝ
故ゟ世俗宝珠阿弥陀如来と称を
伽藍
子安観世音 當寺ゟ安を画像や
縁起略ゟ云 建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其
途中一人の婦あり〳〵告て云く此霊像ハ梁武帝未皇
太子まし〳〵時常ゟ観音を祈念し〳〵或時此
霊像を感得なし〳〵程なく太子降誕
せり昭明太子是なり其後此霊像本朝ゟ渡
延喜帝の震筆
本尊の背面ゟ永隆元年
十一月十七日彫刻と鐫
縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ
和田義盛撰ル所と
画

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



高山
稲荷社

薩州矣
き藩の
南よなり

欽明天皇御崇敬あり又醍醐天皇も尊信なしゝ
ひ震翰を注き縁起を作らせ玉ふと将軍よとまふ
なり頼朝卿こゝを得ひ鎌倉よ安置しる信浅う
さるあり其須和田左衛門尉義盛再縁起を書添う
しなり此霊像鎌倉兵乱の後當寺よ迁しまつりぬ

辨財天　慈覚大師江州竹生島よ指てわたし頃海中
波間よ影現あり宇賀神社形を模擬し御長七寸
三分よ彫刻なひかを當寺よ安置しるとまふ

石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両筑の間の小路
を入く西の方二丁斗よあり祭神詳ならす同所天台宗
安泰寺の持なり昔八遮軍神よ作らり寄願ある者の
成就の後八必何よらひ樹木を携へ来り社地よ栽く

東禪寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

賽をといふ此地を石神横町と字するハ此社ある所なり
土人訛りて石神横町と唱ふ

佛日山東禪寺　同所高輪中町にあり

四箇寺の一なり本尊ハ釋迦如来開山ハ嶺南和尚と号ク
宝鑑國師と諡せり和尚ハ日向國飫肥の人守永氏肥前守祐良の五男なり幼より佛門に入く後宗門の大徳となり頗る世に称せり
七日寂せ慶長の頃江戸に来り寛永二十年癸未七月廿歳六十二是なり阿左布より一宇を開く當寺其地を今も靈南坂と云
臨む此門の額海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯の筆

宝鑑録云
教諡大法鑑禪師嶺南和尚大心中興主盟東禪開闢始祖得法洛西之地捴轉向上機關盛化海東之邊云

有喜壽八幡宮　寺外右の方にあり安泰寺奉祀す

此地を有喜壽の森と号く

谷山　今云所ハ品川の入口にあり

昔ハ大日山と号くる海に臨む丘をさしく
諸侯八人の第宅ありしゆゑ谷山ハ邑名ありく目黒の南より
唱ふるといへども証とするにたらず紫の一本と云る草爺より昔
袖ヶ崎仙墓庵別荘の地の辺へかけく都て谷山村なりしハ昔此地より出崎ありしとも或ハ
此地ハ限る号ありしハ大日山と云ひし此地より石像の
後世其堂宇破壊せし頃谷山稲荷の地へ大日如来立せるを又品川北馬場の光嚴
寺へ収るといへと今ハ其石像の所在をしらず

古へ老樹の柊一株ありて域人云鵜の塒ありしとも鵜ハ巣樹とも

江戸名所圖會天樞下終

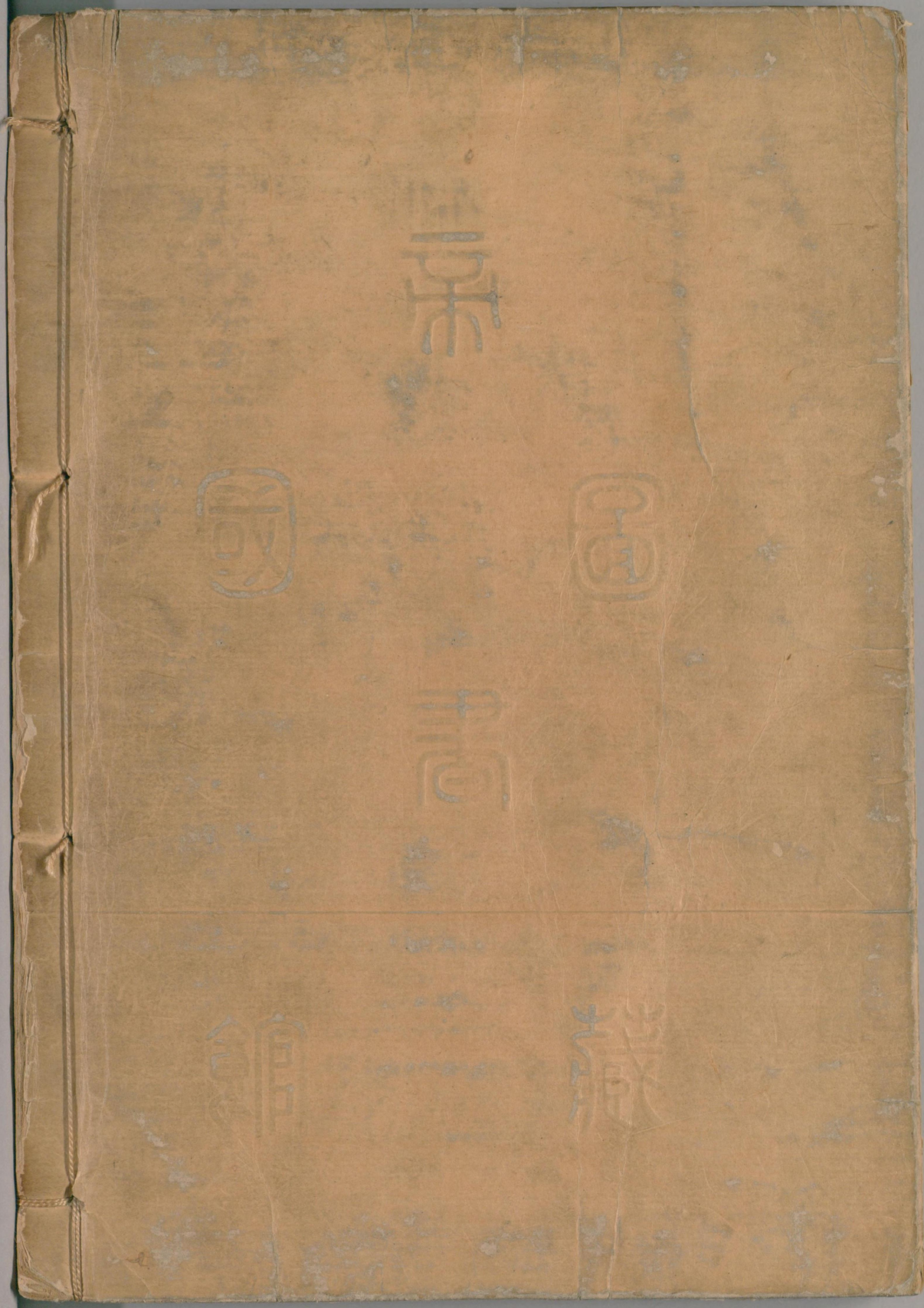
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

124
20
114

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用